

# 共同研究 ジョン・ラーベ「日記」の異同について（一）

門山 榮作  
東中野 修道

## まえがき（一） 共同研究に至る経緯

この共同研究を私たちが思い立った契機は、今から十九年前の平成九年（一九九七年）にエルヴィン・ヴィツケルト編『ジョン・ラーベ——南京の良きドイツ人』の邦訳として『南京の真実』（講談社）が出版された時にまで遡る。両書を見て驚かされたことには、南京城門陥落の十二月十三日と残敵掃蕩戦開始の翌十四日の日記が区別されることなく綴られていた。日記を書くことを習慣としている人ならば、いかに多忙な日でも一行か二行かは後日になってから思い出しながら書くものである。いったいなぜ二日分が纏めて書かれていたのか。日記の形式としては信じがたいことであった。

この疑問が私たちをとらえて離さなかった。たまたま二〇〇一年（平成十三年）の九・一一の前後にイェール

大学で資料調査と複写をしていたときラーベの「日記」——これから私たちが比較照合しようとするものと同じであったと後日判明した『南京上空の敵機』——がそこにあると知らされたので、それをヴィツケルト編『ジョン・ラーベ』と比較照合してみたが、やはり十二月十三日と十四日の間に区別はなかった。それだけではなかった。イェール大学所蔵版の十二月十三日の記述とヴィツケルト編『ジョン・ラーベ』のそれとを一行ずつ照合してみると、文言の違いが随所に見られたのである。

しかしその後は日本語史料と英語史料の方に私の研究の比重が移動してしまったため、長い間この問題は私の問題意識の片隅に追いやられていた。それが平成二十一年になってから再び私の意識に上ってきたため、南京事件研究会（平成十一年八月）以来同学同行の門山榮作氏に共同研究を呼びかけ、ラーベ「日記」の元原稿——手書きの原本——の所蔵調査と入手とに着手した。ドイツの友人にも依頼して探してもらったが、いづれも無駄に終わってしまった。手書きの原稿はどこかにはあるはずなのだが、それが入手できないまま所蔵調査に終止符を打たざるを得なかったため、平成二十五年春に門山氏を通じてドイツ外務省政治公文書館からラーベ「日記」（DVD三巻）を取り寄せてもらい、それを今回の共同研究の基礎とするよりほかなかった。そのDVDは次のような構成となっている。

(一) 『南京上空の敵機』 (*Feindliche Flieger über Nanking*) 全七巻、一、七八二頁。

(二) 『南京爆撃』 (*Bomben über Nanking*) 八二〇頁。

これを機に、ほぼ毎月一回の割合で門山氏と研究会を開いた結果、ラーベの「日記」にかんする基本的なこととして次のことが判明する。それを次に概説しておきたい。

まえがき(二) ジョン・ラーベの「日記」について

右の(二)の『南京爆撃』を見てみると、まず表紙の上段に「南京爆撃——生き仏の日記」というタイトルがタイプ打ちされている。そして中段に飛行機八機や仏塔の絵が挿入され、下段には「ジョン・H・D・ラーベ：南京」とタイプ打ちされていて、その次の頁が次のような「序文」(Vorwort)となっていた。(傍点は筆者が付したものである)。

これは読んで楽しいというものではない。一見したところそう見えるかも知れないが、これは日記——事実の報告——であって、公表するためではなく、妻とごく親しい親族のために書かれるか集められたものである。公表は明らかな理由から今はできないにしても、いつの日にか公表が適切と思われることにでもなれば、あらかじめドイツ政府から公表の許可を得てなすべきである。

南京安全地帯国際委員会が日本大使館に宛てた全ての報告と文書は、私が英語からドイツ語に翻訳したものであり、アメリカ当局との間の往復書簡についても同様である。

一九四二年十月一日、ベルリンにて、

ジョン・ラーベ

このように(二)の『南京爆撃』は始まっている。この「序文」は(一)の『南京上空の敵機』には見えない。ただヴィッケルト版(S21)がこれを載せているので、日本語版(二七一頁)にも出てくる。ここで傍点を付した箇所を文末から文頭の順に説明していくと、次のように要約できよう。

一、この(二)の『南京爆撃』はラーベがベルリンで「一九四二年十月一日」までにタイプ打ちして纏め上げた

ものであった。

二、ラーベは英語からドイツ語に「翻訳」するほど英語に堪能であった。

三、もともとこの「日記」は親しい親族のために「書かれた」(geschrieben……wurde)ものであった。すなわち手書きであった。そう、ヴィツケルトも判断する。南京陥落六十周年の一九九七年(平成九年)に出たエルヴィン・ヴィツケルト編『ジョン・ラーベ——南京の良きドイツ人』はこう言っている。なお傍点は筆者の付したものである。

彼は戦争の全期間を通じて抑留されていたジーマンス社員の世話係という仕事しか会社から与えられなかった。そこで彼は南京でメモにして書き留めていたことを清書する余裕を得ることになった。一九三七年九月から一九三八年四月までを特に分厚くもない七巻にして妻に捧げた……。(Erwin Wickert, John Rabe, S.378)

ラーベは南京でメモ書きしたものをベルリンで「清書」(ins reine schreiben)したと言うのである。タイプ打ちの際の訂正の痕跡が(一)の『南京上空の敵機』にも(二)の『南京爆撃』にもほとんどないのはそのためであった。一方、ラーベの言う集められたとは、清書された走り書きと国際委員会の日本大使館宛て文書や新聞切り抜きなどが集められて、一冊に纏められたという意味であろう。

それゆえ南京占領当時に走り書きされた「メモ書き」のようなのがあつて、それがちにベルリンでタイプ打ち——清書——されて早くとも一九三八年には(一)の『南京上空の敵機』となり、次いで一九四二年までに(二)の『南京爆撃』となったと言つてよい。ラーベの「日記」は後年になって細部が書き換えられた日

記であった。右に傍点を付したように、やはり三種類の「日記」が存在したのである。

このことは少なくとも次のことを意味する。執筆者がその日の出来事や感慨を日々の記録として在るがままに、たとえ不都合な事実でも包み隠さずに率直に記した日記は客観的であるだけに、過去の出来事を再構成するうえで、歴史上上の価値は高い。しかし後に加筆や削除がなされた日記となると、無意識裡に自己正当化が働いていないとも限らない。特に注意が必要となる所以である。

四、この「日記」は公表するためには書かれたのではないとラーベは一九四二年に書いている。ところが一九三八年二月二十三日に帰国の途についたラーベは上海でその一部を公表していたのである。

実は、上海のドイツ語雑誌『東アジア観察』(Ostasiatischer Beobachter) 一九三八年三月号には、「南京避難民地帯国際委員会委員長ジョン・ラーベの日記から」(Aus dem Tagebuch von John Rabe, Vorsitzendem des Internationalen Komitees der Nanking-er Flüchtlings-Zone) と題する、城門陥落直前の十二月九日、十一日、十二日の日記の抜粋が出ている。

そのことが(一)の一九三八年の『南京上空の敵機』をざっと見ている時、偶然にもそこに収録された切り抜き(Teil3 DSC 0643~0645)から判明した。ラーベは将来の公表を期して日記をつけていたと言っている。

五、では、ラーベの言うように、「これは事実の報告である」(es ist ein Tatsachenbericht)と、文字通り私たちは受け取ってよいのであろうか。

これも(一)の『南京上空の敵機』を漫然と眺めていたときに偶々発見した、上海のドイツ語新聞『東アジアアロイド』の二月二十六日の記事「ジョン・ラーベ氏に挨拶」(Teil3 DSC0638)によれば、ラーベは「前日(註、二十五日)の午後上海に到着」(gestern nachmittags in Shanghai getroffen ist)していた。揚子江河口の上

海へは南京から四百キロの距離であるから、十二月中旬から翌年三月までの減水期にあたっていたとはいえ、二月二十三日南京出発、二十五日上海到着という船旅は普通であつたらう。ラーベの二十五日上海到着を疑う理由はないのである。ところが公刊されたラーベの「日記」によれば、上海到着は出発から四日後の二月二十七日とされていた。これは単なる記憶違いと言えるのだろうか。上海到着の月日は手元の『東アジアロイド』（徳文遠東新聞報）の切り抜きの記事（Teil 3 DSC 0640）からラーベにも確認できることであつた。

それゆえ右の二事にかんする限り、この「日記」の記述は「事実の報告」ではなかつたと言わざるを得ないであらう。

このような思いもしない事実にはラーベ「日記」（DVD版）をざっと概観していて気づかされたのだが、先入観と予断が禁物であることはもとより言うまでもない。

### まえがき（三） ラーベ「日記」の全体の構成について

これまで述べてきたことを纏めてみると次のようになる。

一九三七年（昭12）十二月十三日未明に南京の城門が陥落したとき南京安全地帯国際委員会の委員長であつたラーベ、その日記が今から十九年前に公刊されると当然のことながら高い評価を以て迎えられたが、公刊されたヴィッケルト編『ジョン・ラーベ——南京の良きドイツ人』は後に見るように必ずしも忠実に「日記」の一言一句を復刻したものではなかつた。しかもラーベの「日記」はそれ自身が将来の公表を念頭において書かれていた。そのうえそこには事実の忠実な記録とはいいがたい一面も垣間見られた。

このようなことから私たちは十九年前に感じた疑問を解明すべく、入手できた二種類の日記、すなわち（一）

の『南京上空の敵機』全七巻と(二)の『南京爆撃』のどこがどう相違しているのか、それはまた(三)のヴィックケルト編『ジョン・ラーベ』(とその邦訳)ではどうなっているのか、「日記」は事実の忠実な記録であったのか、というような実面に面倒な検証作業に取り组まざるを得なくなつた。それに鋭意取り组んでくださったのがドイツ語科のご出身で銀行員として四年間のドイツ滞在のご経験をお持ちの門山氏であつた。後に見るようにラーベの走り書きのメモを判読なされたのも氏であつた。そうしてできあがつた氏の原稿を私(東中野)が検討し、次に氏が私の朱筆を検討するという流れのもと、氏が全ての異同を照合し、東中野が〈比較研究〉を記すという形で、本稿はできあがつている。そこで私たちが共同研究の対象とした四冊について改めて列挙しておきたい。

(一) タイプ打ちの『南京上空の敵機』全七巻 (*Feindliche Flieger über Nanking*) 一、七八二頁、一九三八年。本稿では、一九三八年の『敵機』と略称する。

(二) タイプ打ちの『南京爆撃』(*Bomben über Nanking*) 八二〇頁、一九四二年。本稿では、一九四二年の『爆撃』と略称する。

(三) Erwin Wickert (Hrsg.), *John Rabe: Der Gute Deutsche von Nanking*. Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt 1997. (エルヴィン・ヴィックケルト編『ジョン・ラーベ——南京の良きドイツ人』一九九七)

本稿ではヴィックケルト版と略称する。

(四) ジョン・ラーベ『南京の真実』(講談社、平野卿子訳、平成九年一九九七年) 本稿では邦訳版と略称する。

その内容は勿論いづれもほぼ同じなのだが、内容的には次のように時期を区切って分類することができよう。一、一九三七年九月二十一日から十一月十八日まで。

(日記の執筆された日から南京安全地帯国際委員会発足の前日まで)

二、十一月十九日から十二月十二日まで。

(南京安全地帯国際委員会の発足から南京城門陥落の前日まで)

三、十二月十三日から一九三八年二月七日まで。

(南京城門陥落から南京安全地帯解散の前日まで)

四、二月八日から二月二十八日まで。

(南京安全地帯の解散からラーベの上海到着まで)

そして一九四二年の(二)の『爆撃』に限って言えば、以上のほかに次の二つが添付されている。

五、いわゆるヒトラーへの上申書。

六、五十七枚の写真とその説明。

従って(二)の一九四二年の『爆撃』を底本として編集された(三)のヴィツケルト編『ジョン・ラーベ』とその訳本としての(四)の邦訳版『南京の真実』も、いわゆるヒトラーへの上申書と写真数枚を載せている。私たちが共同研究の対象とした四種類の「日記」は内容的には以上のようなようであった。

**まえがき(四) ラーベ「日記」の始めに置かれた「前置き」について**

右に記したように、ラーベの「日記」は九月二十一日から始まっているのかと言えば、そうではない。四種類の「日記」とともに、「九月二十一日」の前にやや長い前置きが置かれている。

(二)の一九三八年の『敵機』は一九三七年九月二十一日の日記の前に南京撤退を促すドイツ大使館の公文書類



を置いている。

(二) の一九四二年の『爆撃』はすでに紹介した「これは日記——事実の報告——である」という序文の後に「生き仏になるのは」という長い文章が続いて、それから九月二十一日の日記が始まっている。

(三) のヴィッケルト編『ジョン・ラーベ』もまず編者の「序文」があつて、それから編者の「原典について」の説明と「どのようにして始まったのか」という編者の歴史解釈が来る。そして九月二十一日の日記が始まる。(四) の邦訳はヴィッケルトの序文という形で「ラーベの日記とその時代」から始まっている。

そこで本稿ではそれらをも訳出することにする。その際、多岐にわたる異同箇所が一目瞭然となるよう、訳文の横に、次のような傍点などを付してその異同の明瞭化を図っている。

- ① (一) の一九三八年の『敵機』にはあるが、(二) の一九四二年の『爆撃』が削除ないしは改変している箇所には「読点」を付した。
- ② (一) の一九三八年の『敵機』と(二) の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三) のヴィッケルト版が削除ないしは改変している箇所には「傍線」を付した。
- ③ (一) の一九三八年の『敵機』にはないが(二) の一九四二年の『爆撃』に加筆されたのち、(三) のヴィッケルト版が削除ないしは加筆している箇所には「破線」を付した。
- ④ (一) の一九三八年の『敵機』と(二) の一九四二年の『爆撃』にはないが、(三) のヴィッケルト版が加筆し(四) の邦訳版が削除ないし改変している箇所には「句点」を付した。
- ⑤ (一) の一九三八年の『敵機』や(二) の一九四二年の『爆撃』、それに(三) のヴィッケルト版にはあるが、

(四) の邦訳版が削除ないしは改変している箇所には「傍線・プラス句点」を付した。

このように傍点などを付しながら、まずは(二)の一九三八年の『敵機』の前置きから見ていくことにしたい。

### 一九三八年の『敵機』の前置き

(一)の一九三八年の『敵機』は「南京上空の敵機——ジョン・H・D・ラーベの日記」という表紙の次から次のように始まっている。

#### 愛する妻に

愛するドーラへ、私たちの二十八回目の結婚記念日(一九三七年十月二十五日)の心に沁みる贈り物として、二十八年前の今日、十一月五日、私たちは天津で新婚旅行を終えた。今また君は天津で、残念ながら一人でいる。でも泣いたりはいしない、悲しくなるから。

南京、一九三七年十一月

お前のジョン

#### 写真と写真説明(本稿では写真割愛)

ジ・メンズ上海本社との電話もこのようにヘルメットをかぶって行く。

一九三七年九月七日、私が北戴河から帰宅してみると、次の手紙や通達が机の上に置かれていた。これらの書類からドイツ当局が南京の情勢を大変深刻にとらえていることがわかった。ここに添付の本日届いた九月二十日付のドイツ大使館の通知、第一七〇二／六八一九／三七号は、南京のドイツ人に出来るだけ速やかにシナを去るように勧告していた。

私はこれから語る理由で、当分の間ここで凌いで、自分がシナで経験したことや、戦争の経過について手元に届いている報告や情報を、私の興味を引く限り、すべて日記に綴ろうと心に決めた。  
南京、一九三七年九月二十一日、  
ジョン・ラーベ

通達

ドイツ大使館、南京、一九三七年八月六日  
第一七〇二／五九一九／三七号

添付一

クルム、マツ、ヒャー、(Krummacher)、ピンカネーレ、(Pinkerelle)、ホート、(Hoh)の三氏を委員とする委員会、作られた。その任務は、南京在住のドイツ国籍の人の安全に関して、照会があった場合に、助言するものである。当地在住の全てのドイツ人は、ここに同封の書式に記入して、折り返し返送されたい。

世帯主または単身者の名前、ジョン・H・D・ラーベ

住所、小桃園、乾河沿、南京

電話、22814

同居するドイツ国籍者、無

- 1、( ) (氏名)  
2、( ) (氏名)

連絡

- 3、 ( ) (氏名)
- 4、 ( ) (氏名)

南京ドイツ学園、南京、一九三七年八月二十三日

備忘録

理事会は情勢を総合的に考慮して、九月半ばに授業を開始することも十月に時期を遅らせることも現実的ではないと考え、本日次のように決定した。

- (1) 現在ドイツに帰国しているドウ・フォス (de Vos) 婦人は、九月一日までにこの九月をもつて契約を終了する。

- (2) ラーベ氏から借りていたこれまでの教室は、同じく九月一日までに契約を終了する。

- (3) メントン校長の解雇通告は十月一日までに考慮する。

署名者

署名 シュプレンガー (Sprenger)

署名 ピルナー (Pirner)

出納役代理

理事長代理、文責

- (1) 本状写しを、ドイツ大使館にお願いしてベルリン外務省経由でドウ・フォス婦人に知らせ、電信で諒解を得ること。(ドウ・フォス婦人のドイツの住所 ( ) )

住所が確認できないときは、ハンブルクの東アジア協会を通じることを提案する。

- (2) 電文の提案。「本校理事会は遺憾ながら九月一日までに契約解除を余儀なくされている。事態が収束すれ

ば再雇用が考慮される」。

(3) ジョン・ラーベ氏への手紙。「本校理事会は状況に鑑み貴殿より賃借中の教室の契約を解除する。部屋は然るべき日に明け渡す」。

(4) 全父兄への表書に追記する。「在校児童のご父兄は、一九三七年九月十五日を含めその日までの授業料を支払うようお願いする。ドイツ人学校を開くか、どのように運営されるかは、ご父兄の意見を聞いたうえで適宜決定する。南京のドイツ人学校は、「一時閉鎖」されたものと見做さざるを得ない」。

(5) 本校理事長、ラウテンシュラーガー博士と参謀本部への表書。

南京、一九三七年八月二十三日、

署名、シュプレングァー (Sprenger)      署名、ピルナー (Pirner)

出納役代理      理事長代理、文責

フイツシャト参事官へ、お目通しと共同署名をお願いします。

読了済み。第2項の外務省経由の発信は指示済み。

署名、M・フイツシャト      八月二十四日

### 航空委員会通知

空襲時のサイン信号

(1) 空襲時の信号の呼びかけ (敵機接近中)

a. 長—短—短 (長は二十秒、短、短、合計三秒。その後、二秒休み、以後五回繰り返し、全部で六回)

b、教会の鐘、祈りの鐘、長―短―短、三分間継続。

(2)、警報信号（敵機はすぐそこ）

a、サイレン信号

三十秒続く長いサイレンと、その後続く短いサイレンで、合計六十秒。

b、教会の鐘

連続打ちの短い警戒の早鐘で、二分継続。

(3)、解除信号（敵機去る）

a、サイレン信号

長い信号で、二分継続。

b、教会の鐘

二分間、打鐘。

注意

I、毒ガス時の信号

(a)、太鼓信号。三打、小休止、三打。

(b)、旗またはランプによる信号、毒ガスが撒かれた区域は、昼なら黄色旗、夜間は赤色ランプで表示する。

II、火災警報、二分間の打鐘。

ガス攻撃を受けたときの防衛（本稿では翻訳を省略）

敵機の空襲を受けたときの市民の行動に関する注意事項（本稿では翻訳を省略）

非常事態および戒厳令下での南京の夜間の交通規制 — シナ語からの翻訳 — （本稿では翻訳を省略）

アジア石油会社から顧客へ注意事項の通知（本稿では翻訳を省略）

### 通達

ドイツ大使館、南京、一九三七年八月二十三日、

第一七〇二／六二五七／三七号

現在、青島では戦火の拡大が懸念されている。南京大使館は青島の町を敵機の行為から出来るだけ守れるよう対策を講じている。

牯嶺 (Killing) は今のところ避難民には安全な場所と見做される。

南京を退去したくて牯嶺が漢口へ移り住むことを計画しているドイツ国籍の人は、当地の船会社で然るべき時期までに座席を確保していただきたい。その場合、ドイツ国籍の人に助言または斡旋する委員会がある。

委任を受けて、

署名 ホーフト

### 通達

ドイツ大使館、南京、一九三七年八月二十七日、

第一七〇二／六三二二／三七号

大使館は、職業上の理由もなく或いは緊急の事由もなく南京に留まっている全てのドイツ帝国籍の人にたいして改めて当地を退去することを求める。

牯嶺 (Kuling) は、目下のところ安全な場所とみなすことができる。  
通達

ドイツ大使館、南京、一九三七年九月一日

第一七〇〇／六四二二／三七号

シナ外交部の見解では、南京に留まる外国人は旅券に内国ビザを必要とする。内国ビザは外交部旅券課において手数料一シナドルで発給される。入国ビザがない旅券の場合には、手数料は高く十シナドルとなる。当地にいるドイツ国籍の人には、内国ビザを外交部旅券課で手配することを勧奨する。

公印

通達

ドイツ大使館、南京、一九三七年九月一日

第一七〇二／六四二四／三七号

大使館は、当地の地方警官と警察が南京在住外国人の生命財産をよりよく保護するため、現在個人状況を確認する作業に従事しているとの連絡をシナ外交部から受けている。外交部は大使館に対してこの旨を当地のドイツ国籍の人に連絡し、確認作業に協力してくれるよう求めてきている。

実施が滞りなく進むよう、地方警官や警察の確認作業に対応するよう心から求めたい。

公印

通達

ドイツ大使館、南京、一九三七年九月二十日



一七〇二／六八一九／三七号

日本の関係当局から大使館に、今月二十一日正午をもって大規模な南京空爆が予定されているとの警告が届いている。友好国の国籍を有するものは、その時までには南京を退去するよう求められている。

南京のドイツ人にはともかく警告に従って、とりあえず可能な限り南京を離れることを切に勧める。

公印

写真と写真説明 (写真は本稿では割愛)

左から右へ、マルゴット・シュミット嬢とロッテ・シュミット (Schmidt) 嬢。私の休暇中の二人の友人。一九三七年八月三十一日に私と一緒に海蘭 (Kallan) 鉱山の石炭運搬船「インゲレン」に乗って上海から秦皇島を通って北戴河へと旅し、そこで無事母のもとに送り届けた。

〔比較と研究Ⅰ〕

このように (二) の一九三八年の『敵機』に「読点」を付した箇所は (二) の一九四二年の『爆撃』では全て削除されている。従って (三) のヴェッケルト版にも (四) の邦訳版にもない。

一九四二年の『爆撃』の前置き

(二) の一九四二年の『爆撃』はすでに引用した一九四二年十月一日付けの「これは読んで楽しいというものではない。……これは日記——事実の報告——である」という「序文」(Vorwort) から始まっている。

これは読んで楽しいというものではない。一見したところそう見えるかも知れないが、これは日記——事実の報告——であって、公表するためではなく妻とごく親しい親族のために書かれるか集められたものである。公表は明らかな理由から今はできないにしても、いつの日にか公表が適切と思われることにでもなれば、あらかじめドイツ政府から公表の許可を得てなすべきである。

南京安全地带国際委員会が日本大使館に宛てた全ての報告と文書は、私が英語からドイツ語に翻訳したものであり、アメリカ当局との間の往復書簡についても同様である。

ベルリンにて、一九四二年十月一日

ジョン・ラーベ

### 〔比較と研究2〕

このように(二)の一九四二年の『爆撃』の「序文」は(一)の一九三七年の『敵機』にはなく、(二)の『爆撃』において初めて加筆されたものである。ということ、これは一九四二年の時点から約五年前の南京占領を振り返った「回想」の類たぐいに属する。(三)のヴィッケルト版(S21)はこの(二)の『爆撃』を底本とし、これを載せているので、(四)の邦訳版(二七二頁)にも出てくる。

これに続いて「生き仏になるのは」(Lebender Buddha zu werden)で始まる長文の文章が(二)の一九四二年の『爆撃』では続く。

生き仏になるのは、親愛なる読者にここではっきりと申しておきたいのですが、今やチベット人ですら簡単では

なく、一介の「ハンブルク人」には全く不可能です。それなのに自分の日記を生き仏の日記などと言えば、ラーベは気でも狂ったのか、あるいはハンブルクで言う「はしやぎ過ぎ」と言われたりするのです。ラーベは頭がおかしいとまでは言われなくともよくもそこまで言えるなど言われそうですが、そうと言われないう、この称号には勲章のような愛着があったのだと自分をいたわってあげねばならないのです。どうしてそうなったのか——まあ、聞いてください。

私は一度も明白な悲観論者であったことはなかった。いつか「不幸なラーベ」なんて処方箋を書かれないようにするため、出来るだけ「カサンドラの予言」をする人たちとは距離を置いてきた。私の健全な人間の理性に照らして、こういうベシミストたちの言うことが必ずしも百パーセント間違っているとは言えないときでも、最後は「おいで、ジョンニー、心配するな」と、樂觀主義者の陣営に入って救われてきた。將軍や州の総督 (Satrape) たちの極東の戦争や革命が時折この日記のこの巻に記述され、商人の打算で仕分けされ見積もられているのだが、そういう中で三十年過ごしてきた私に、これ以外の凌ぎ様があっただろうか。例えば、上海と天津を結ぶ大動脈の津浦鐵路が事変 (Kriegische Ereignisse) で二年も麻痺したことはほんの一例である。私は一度ならず戦争への対応 (Kriegische Massnahmen) のため何週間も何ヶ月も家族と引き裂かれ、外部世界との交通は北京で遮断された。しかしそれがために何かを「特に心配した」ということはなかった。仲間内では次のように言ったものだ。戦争はシナ人たちだけのもの、そもそも我々ヨーロッパ人には脅威ではない、——折り合ねばならぬのは夏の暑さと砂嵐、——そのほかはまあ「赤い共産党」(Roten Hund) ぐらいかな、と。従って一九三七年の夏に北京近郊の蘆溝橋で日シ紛争が生じたとき、南京にいる我々はこの小競り合いは北方で局所的に処理されるだろうという意見だった。それが天津までもが巻き添えにされことで居心地は悪くなった。北へと向かう鉄道

が利用できなくなつたからだ。

### 〔比較と研究3〕

このように(二)の一九四二年の『爆撃』に「破線」を付した箇所は(一)の一九三七年の『敵機』にはなく、(二)の『爆撃』において初めて加筆されたものである。ただ(三)のヴィッケルト版(S21)はこれを載せていない。

### 〔比較と研究4〕

ラーベは日記を「生き仏の日記」と位置づけている。生き仏はラーベも少し触れているようにチベット仏教の信仰に基づく独特の生きた思想である。一般にラマ教と呼ばれるチベット仏教では優れたラマ(師僧)が衆生の救済にあたる菩薩の化身「活仏」——生き仏——とみなされ、その活仏のなかでも最も有名なのが観音菩薩の化身としてのダライ・ラマと阿弥陀菩薩の化身としてのパンチェン・ラマである。ラーベが生き仏と呼ばれたという事実を南京のアメリカ人の残した記録に確認することはできない。いかに強い愛着があつたとはいえ自らを活仏のダライ・ラマに近いと言うことは、キリスト教のローマ法王に近いと言うのと変わりはない。彼自ら言うように、「はしやぎ過ぎ」であろう。

これに続けて(二)の一九四二年の『爆撃』は次のように続いていく。

南京は夏には大変暑くなる。従つて七、八月の頃、夏の休暇は青島、芝罘(Chetoo)とか天津と大連の間にある北戴河などで過<sup>2)</sup>ごしたりする。私の妻もすでに六月には北戴河に行つていた。陸路の津浦鐵路がもう天津ま

で行かなくなったので、私は石炭運搬船に乗って上海經由で秦皇島まで行かねばならなかった。同じ目的地へ行くとしていた我がシユミット氏の二人の娘さんはそのことを大変喜んだ。というのは男性の同行なくして上海から北戴河への旅行はしてはいけないからだ。彼女たちは歌を唄ったりユーモアで旅の時間を忘れさせてくれた。蒸気船は実に汚なかつたが、船室は涼しく広かつた。私の船室にあつた外交官用事務机が風呂桶を覆いかくすまがいのだと分つていれば、旅行ももつと楽しんで、浴室へ歩いていなくて済んだだろう。こんな小さな石炭運搬船でも正しく知らないうちは文句を言つてはなるまい。家族連れの人ルウエー人の船長は乗船客(実に我々だけだつた)に感激して秦皇島に着いた時は、鉱山組合のクラブハウスにお茶に招いてくれた。そこで夕べのひと時が過ぎるうち、音楽の快く響くお茶会となり、信じられないほど楽しいものとなつて、とりわけ秦皇島の名士たちが全員といつていいほど次第に集まつてきたのだ。私はこの機会に海蘭(Kailan) 鉱山のつとに有名な所長に会つて、冗談半分に彼の日本人共同経営者について質問した。すると彼は、「シツ、縁起でもない、壁に耳あり!」と私を制した。秦皇島は当時すでに日本軍に征服されていて、高射砲を装備した日本軍部隊がとぎれることなく天津に向かつて行進していく。ちよつと深刻な気分になつた。どうやら事態は私が想像していた以上にだいぶ深刻じゃないか!

註1、芝罘(Chefoo)は渤海湾沿いの山東半島に位置する景勝の地で、現在は山東省煙台市となつている。その東には英国が一八九八年に租借した威海衛が位置している。

註2、北戴河は河北省秦皇島市の渤海湾に面する。今日でも風光明媚な避暑地として、また毎年七月末から八月始めにかけては中国共産党の最高幹部が一同に会して政策協議をおこなう北戴河会議として有名である。

北戴河は秦皇島から一時間ほどだが、ずっと前に日本軍に占領されたとは少しも感じられなかった。しかし空気がどことなく張りつめていた。そのため直ぐに上海行きへの切符を秦皇島で手配することにした。答えは「二か月間は満席」であった。それでも何とか一番早く帰れる方法はないかと思案していると、上海が日本軍に攻撃されたのでこの港を経由して南京に行くのは当分見込めないとの情報が入ってきた。さてさて困ったものだがしかしそれから南京が日本軍機に見舞われひどく爆撃されたという報せが伝わってきて、事態の深刻さを十分に認識した。今やもう海路天津から芝罘 (Chefoo) または青島へ出て、そこから膠濟線 (Kaiaisi Bahn) で済南 (Tsinanfu) を經由して南京に行くしか方法はなかった。

一九三七年八月二十八日に夜霧のなかを妻と別れて、大した遅れもなく十五時間後には天津に着いた。良友たちが、煙突までシナ人で鈴なりの英国籍の沿岸蒸気船 (Kustendampfer) に私の航海の手続きをしてくれた。ちょうど時間はまだ十分あったので、私は天津で起きた戦争の破壊のつめ跡を眺めた。中でも我々が大変苦勞して建設した自動電話局の一つは破壊を免れていなかった。街路には鉄条網のバリケードが張り巡らされていたが、日本人はどこでも我々ドイツ人を文句も言わずに通してくれた。それから避難するシナ人で溢れる二隻のボートを曳く小さなタグボートに土砂降りの雨のなか乗って、白河 (Pehho) を何時間もかけて下り、太沽 (Taku) に向かった。そこから我々を芝罘に運んでくれる手配済みの沿岸蒸気船には文字通りシナ人が殺到していた。その混雑で私はカバンをなくしたが、ずいぶん探した末、やっと見つけた。その他は旅行中無事だった。

芝罘も土砂降りの雨だった。船を降りて、バリケードの針金を乗り越え、やっと力車を掴まえてホテルへ行くように言った。夕闇が支配していた。力車の幌を少し横に空けて、辺りの様子を知らうとぼんやりと見る。居酒屋が一つ、二つ、三つ、四つ、そして教会が一つ、そしてまた一つ、二つ、三つと、居酒屋それに教会が二つ、

するとまたまた居酒屋が幾つか、という具合だった。車夫が力車を止めようとしたところはプラザホテルの前だった。私は、なるほどお上品というわけではないが、二回りも年の違う爺さんとして、どう見てもプラザホテルの肌も露わな若い娘には適わ<sup>あな</sup>ないことははっきりしていた。私はシナ語の一番美しい侮り言葉で逃げ出す他なかった。私の知っていた言葉で、その車夫の苦力を父無子<sup>ててみして</sup> (Schilckroelen) と呼んだ。この言葉は勿論上品ではなかったが、効果ありだった。貧しい悪魔は、疲れた足で海沿いの道を精一杯走り、プロムナードのほぼ端にあったビーチホテルに運んでくれた。ホテルは立派な建物で、私はずぶ濡れの猫のようにおとなしく力車を下りた。芝罘の我々の代理店は Anz & Co. で、その会社の所有者のブーセ (Busse) 氏は旧友の一人で、一九一九年に彼と一緒に私はドイツへ送還されたのだ。(彼は、私が当時ノバラ号上<sup>ま</sup>に「an Bord der Nobara」設立した、自らの発券紙幣を保有する緊急通貨銀行「Notgeld Bank」の共同理事だった) 私は電話で彼に連絡をとってもらった。「ブーセ君、僕は力車に乗って居酒屋を九つ、教会を三つ通り、やっとこさ、プラザホテルを抜け出してきたんだけど、ここには他に見る物はないのかい」。すると彼はこう答えた。「あのね、君はまだ半分も知らないんだよ！」

芝罘は魅力的な場所にある。Anz & Co. の所有者のブーセ氏とシュミット氏 (Schmidt) は人を虜にする人で、私が金を払う客としてすぐ紹介された国際クラブは、シナの海岸沿いの中でもとびっきり魅力的なクラブ・バーを所有していた。かつてはカウンター (Bar-Tisch) の後ろに表示板 (Tableaux) があつたはずだった。他所者<sup>よそのもの</sup> (Freendings) は金を払う客で、その客がサイコロを振って一回負けると、外からは全く見えない隠しボタンで操作されていた。サイコロで他所者が一丁上がりとなるや、蓋が落ちて「他所者にはいつも金をはたかせる (We always stuck foreigners) / 他所者はつうちさめさ (Wir legen Fremde immer hinein)」と書かれた表示が出る。ブー

セ氏は、芝罘では一番の古株の一人である。彼の立派なクラブにかつてはドイツ人クラブが作られ、その会則が壁にかかっている、次のように書かれていた。

1. 飲酒は原則厳禁

2. 痛飲は精々日曜日だけ許可

3. 二人が会うときは日曜日に！

私は糖尿病を患っているので、インスリンを南京にもっていきなかつた。それでブーセ氏と探しに出かけた。

その地の薬局とドラッグストアを全部見て回って、見た目にもひどいチューブ入り二本を見つけた後、ブーセ氏は考え込んでいた。「じゃ、とにかく私の倉庫へ行こう。インスリンの卸をやっているんだ。在庫がまだあるか、調べてみよう」。倉庫はいっぱいだった。ブーセ氏は、私の買い注文にも一度で売り尽くすことはしなかつた。翌日になってようやく彼はすべての薬局とドラッグストアに店の棚を空にすることなくインスリンを注文するよりに言つて利益をあげた。

ブーセ氏とシュミット氏は交互に私を夕食に招いてくれた。二人のところはまったく快適で、こんなところは芝罘のどこを探してもなかつた。シュミット家では大勢の子供たちがはしゃぎまわっていたが、しばらくの間、どこの子なのかかわからず不思議に思つていた。子供たちがみな「ミス」と呼んでいた若い婦人を母親として話しかけていたからである。後になって分かつたことには、その婦人はシュミット氏の娘さんで、ミス氏と結婚していたのだ。それで謎が解けた。一座は私の長い前座の話に大笑いだった。ブーセ氏の娘さん（後のクレীগー夫人）も青島經由で南京から着いた時は大喜びだった。しかし彼女がもたらした報せは悪いものだった。南京は八月にひどい爆撃を受けて、住民の脱出が止まらないという。おまけに芝罘の周辺は洪水に見舞われた。膠濟線



(Kiaotsi-Bahn) までバスで行くのは勧められないという。ブーセ嬢自身が利用していたバスは、何度も立ち往生し、ポンコツ車を浮かせるため、乗客は皆降りざるを得なかった。

「僕に任せてくれるかい。青島へは蒸気船で行けるようにしてあげるよ」とブーセ氏は言っていた。そして実際そうになった。芝罘を離れるのは辛かった。こういう愉快な人たちと一緒にいると戦争のことなど忘れてしまうのだ。私の乗った蒸気船はまたしてもシナ人難民で船べりまで溢れていた。私はサロンの夜間の部屋に収まったが、ブーセ氏と親しい仲の船長がそうはさせまいと、快適な設備の整った船室をあてがってくれた。

青島で偶然初めて出会ったドイツ人は南京政府の軍事顧問で「アリ叔父さん」こと、フォン・ラメザン (Von Lamezan) 男爵だった。彼はちやうど故郷（故郷）に帰るところで、そのときシュトレーシウス將軍 (Streccius) の夫人と息子のヨッヘン (Joehen) に付き添って青島まで一緒に来ていたのだ。というのは、將軍夫人は南京空爆のとき心臓発作を起こし、青島で快復するのを待っていた。私は二人から日本軍の最初の南京爆撃の様子を詳しく聞いた。シュトレーシウス夫人は爆弾が左右に落ちるなかり通りで遊ぶ息子のことがどれほど心配だったか、目に見えるように語ってくれた。その息子には何事もなかったのに、残念ながら母親である彼女は私が青島を去ってから数日後に心臓発作でやられた。それから私は旧友のオーバリンク (Obering) や以前から青島で小さな家を買って紳士農園 (Gentleman-Farmer) をやっているヘルマン・シュリヒティガー (Hermann Schlichiger) を訪ねた。この人と、かつてドイツの土地だった山や谷をもう一度見るため青島じゆうを巡り歩いた。日本人の疎開した地域も訪ね当て、当時はまだ完全に無傷だったことを自分の目で確かめることができたが、後にシナ人にひどく破壊されることになる。

青島から済南へは鉄道で、何事もなく時間は過ぎた。膠濟線 (Kiaotsi-Bahn) の両側の村や畑は見渡す限り洪

水で溢れていた。所々で農民が倒れた家の梁にしゃがみ込んでいた。

列車が止まるや、物乞いする住民たちの嘆き悲しむ叫びが窓越しに聞こえてきた。済南では美味しいドイツ・ソーセージで有名なドイツ・ホテル「Stein & Schad」にもう一度立ち寄って休憩をとった。そこではこう歌われている。

うまいソーセージが済南にあるよ

牛肉は雌牛からとるのだ

ドイツ人二十人がそっちに行っている

領事殿は偉い人だ。

そしてそれから津浦鐵路 (Tsin-Pu-Bahn) で問題なく浦口に行つて、浦口からは揚子江を渡つて南京に着いた。詮索好きなシナの役人が「おまえは誰か」と馬鹿な質問をするので、大徳兵——偉大なるドイツ兵 (grosser deutscher Soldat) ——つまりドイツ軍事顧問だと答えた。この助言は「オンケル叔父さん」からそつと教えられたもので、「大徳兵」はまだ通用していた。

一九三七年九月七日、平時なら列車で四十時間で帰れるところ、十日半の旅を終えて再び南京に着いた。

私の机にはこの間に届けられたドイツ大使館からの書類が束となっていた。クルムマツヒヤール (Krummacker) 、ピンカネーレ (Pinkerelle) 、ホート (Hoh) で構成する委員会が作られていて、その役目は南京在住のドイツ国籍の人々の安全について質問があれば助言をすることであった。私が創立したドイツ学園からは理事が全教員の契約終了と学校閉鎖を通知してきていた。航空委員会からの通知は空襲時のサイレンとそ

の対応について取り決めに伝えてきていた。非常事態と戒厳状態が敷かれたときの交通管制についてはシナ政府作

成の規則の翻訳があった。次に、職業上あるいは他の緊急事由もないのに南京在留を余儀なくされているドイツ国籍の人々全員にたいして改めて退去を命ずる一九三七年八月二十七日付けのドイツ大使館の通知があった。

金持ちで経済的に恵まれたシナ人はとくに揚子江上流の漢口へと逃げ始めていた。中庭や、庭園、公共の場所や通りには急ピッチで地下室が作られたが、それ以外は静かだった。しかしそれでも九月十九日と二十日までであった。この両日に私は四回航空機による南京砲撃の洗礼を受けた。

この日付を以て私の戦争日記は始まる。(Mit diesem Datum beginnt mein Kriegstagebuch.)

砲撃が最も酷かったとき私はシナ人と一緒に自分たちで作った地下室にいた。そこは爆撃に耐えられる造りではなかったが、それでも榴弾の炸裂や砲弾の破片からは守られていた。さらに庭には六メートルと三メートル四方の帆布を張って、それに鉤十字の旗を描いた。大変都合だったのは、政府が警報装置を設けていたことだ。空爆の二十分から三十分前には大音響のサイレンが鳴り響いて、それを合図に歩行者は素早く通りから消えたに違いない。そのときは行き交う車も止まった。歩行者は地下室に潜り込み、すでに述べたように地下室はたとえ急場凌ぎのものであっても、どの通りにも作られていた。地下室の中の時間はそこにいるだけでもう不快だった。

### 〔比較と研究5〕

このように(二)の一九四二年の『爆撃』に「破線」を付した箇所は(一)の一九三七年の『敵機』にはなく、(二)の『爆撃』において初めて加筆された文章である。従ってこの部分も約五年前の南京占領を一九四二年の時点から振り返った「回想」の類(たぐい)に属する。(三)のヴィッケルト版(S21)はこれを載せていない。ただその概要は邦訳版の「迫りくる砲声」(22頁)に要約されている。

## 〔比較と研究6〕

このようにラーベは(二)の一九四二年の『爆撃』に「この日付を以て私の戦争日記は始まる」(Mit diesem Datum beginnt mein Kriegstagebuch.)と書いて、それから九月二十一日の日記の記述に入っている。が、これは(一)の一九三八年の『敵機』にはない表現なのである。(三)のヴィッケルト版(S31)にはこの表現はあるが、どうしたことか、九月二十一日ではなく二十二日の日記の記述の冒頭に移されている。その理由は分からない。

## 〔比較と研究7〕

青島はドイツ人にとって特別な思い入れのある町であった。日清戦争から三年後の一八九八年(明31)宣教師殺害事件を契機に膠州湾を九十九年間租借することになったドイツは、その湾沿いに青島を建設した。その後大正三年(一九一四年)に第一次大戦が勃発すると膠州湾と青島は日本に占領され、一九二二年ワシントン会議の九カ国条約の結果、日本からシナに返還されたが、それでもドイツ人の都市建設のアイデアに基づいて創られた青島はドイツの面影が「今日」<sup>1)</sup>まで残っている。ラーベが遠いシナ大陸にあつて「ドイツであるかのように錯覚する」と言われる青島をよく訪問したのも、蓋し当然であつた。

註1、荻野純一・今井卓『青島と山東半島——ドイツの模範植民都市の虚像・実像』日経BP企画、平成一九年、一四頁。

## 〔比較と研究8〕

ラーベはこのように(二)の一九四二年の『爆撃』では、「八月二十八日に夜霧のなかを北戴河で妻と別れて……天津に着いた。……九月七日……南京に着いた」と記している。この間、北戴河には滞在できなかったはずなのだが、すでに訳出した(一)の一九三八年の『敵機』においては、「八月三十一日に……上海から秦皇島を通つ

て北戴河へと旅し、そこで無事（二人の娘さんを）母のもとに送り届けた」（本稿十七頁）と記している。単なる記憶違いなのか、それとも何らかの思いがあつたことなのか、それは分からない。

〔比較と研究9〕

このように、「シユトレーシウス夫人は……私が青島を去つてから数日後に心臓発作でやられた」と、ラーベは（二）の一九四二年の『爆撃』に記している。とすれば同夫人の死亡は八月末から九月初めのことと推定される。ところが、（一）の一九三八年の『敵機』の十月十一日には、九月二十八日死亡という死亡公告とその記事が切り抜かれて貼られていることから、理由はともあれ、死亡日を九月二十八日から九月一日前後に変更していることになる。

ヴァイッケルト版の前置き——『序文』

（三）のヴァイッケルト版の前置きを紹介する前に、ヴァイッケルトがこの「日記」を出版するに至った経緯を紹介しておきたい。以下は、ドイツが地上中継局（東アジア向けはマルタ島から）や衛星放送を通じて全世界五大陸に放送している短波放送「ドイッチェ・ヴェレ」を、平成十四年（二〇〇二年）十月十三日（日本時間）に門山氏が聴取して翻訳した一節である。ヴァイッケルトはドイッチェ・ヴェレのインタビュアーに次のように答えている。

彼は十年間ドイツに帰っていなかったの、ドイツを去った時のナチ党の思い出しかなかったのです。党員資格がなくなり、食事に事欠き、ひっそりと死にました。彼が死ぬ直前、ラーベが戦争を生き延びていたこと

を知ったシナはラーベに贈り物をしました。それで彼は二、三カ月を生き延びることができました。その後私は私の回想録にラーベのことを書きました。それを読んだラーベの孫のお一人がラーベにはこの時期のことを書いた日記があると言ってきましたので、それを要約して出版しました。<sup>1)</sup>

註1、門山榮作「エルヴィン・ヴィツケルト、ドイッチェ・ヴェレに語る」『日本「南京」学会会報』第六号、平成十四年十一月、七頁。

このような経緯でヴィツケルトはラーベの遺族から提供された「日記」を刊行したと言う。そしてその刊行されたヴィツケルト版の「日記」はすでに述べたように「序文」(Vorwort)から始まっていて、邦訳版でも冒頭の「ラーベの日記とその時代」(九頁〜十八頁)に訳されている。

#### ヴィツケルト版の前置き——『序文』(続)

・ジ・ヨ・ン・ラ・ー・ベは一八八二年十一月二十三日生まれのハンブルク人である。父は船長だったが若死にしたため、息子のジ・ヨ・ンは中等教育の「第一学年」の修了試験に合格していたが学業を断念しなければならなかった。その後二年半の見習い期間を経てハンブルクの輸出代理店で半年間店員(Handlungsgehilfe)となった。一九〇三年上司の薦めで南東アフリカのポルトガル領モザンビークの首都ロレンソマルクスに渡り、イギリスの有名な会社で働いた。彼のなまみのない英語はそこから生れた。

一九〇六年マラリヤに罹り帰国を余儀なくされた。一九〇八年再び海外に出て今度は北京に行き、一九〇九年上海でハンブルク出身の若い娘と結婚した。その後ちょっと中断があつたが三十年間シナで暮らした。始めは

ハンブルク人の経営する会社で働き、一九一一年以来同じように北京にあるジーマンスの代理店で働いた。第一次世界大戦中も、一九一七年に協商国家の圧力によりシナがドイツに宣戦を布告していた中であつてもそこにとどまつた。ラーベは自分がジーマンス北京を経営していることが(邦訳版は「ジーマンスが」に改変)シナのみならず、シナ人の利益そのものであることを納得させることができた。シナではこういうことが可能だったのだ。だが一九一九年イギリスの圧力によつて、ラーベは他のドイツ人とともに本国へ送還された。ドイツ人の競争相手はシナでは招かれざる客だったのだ(註、邦訳版は削除)。しかし一年後ラーベは再びドイツを後にし、いったん日本を経由して、つまり裏口から(註、邦訳版は削除)シナへ戻つて北京でジーマンスの仕事再開した。とはいえ本社を上海に置くシナ・ジーマンス社が、公然と業務を行うことを許容されるまでは傀儡の、シナのあつた会社を隠れ蓑にした(註、邦訳版は「中国の麦高会社の名を借りての営業だった」に変更)。最初は北京で、その後天津に移り、一九三一年からは当時のシナの首都南京のジーマンス支社の代表となつた。一九三八年ベルリンのジーマンス本社からドイツに呼び戻されたが、もはや責任ある地位につくことはなかつた。六十五歳で退職して年金生活に入り、その二年後の一九五〇年一月五日に死んだ。

海外で活動するビジネスマンの一生は、もしジョン・ラーベが二十五万人のシナ人の救済のためにしばしば命を危険にさらして半年間にわたつて商人の日常生活から一歩も踏み出すということがなかつたなら、特に珍しくも興奮するものではなかつたろう。南京市は崇高な人間の証として(註、邦訳版は「一九九七年」を挿入)市の記念館に彼の墓石を建てた。シナでは人間性など知られていないと思うのは誤りだ。

門弟の樊遲(はんち)が師に問うた。「仁(Menschsein)とは何か」と。孔子は答えた。「人を愛すること」だ。

孔子の哲学において仁、人間性とは、その中心にある道徳上の概念である。くりかえし孔子はそこへ立ちかえっている。孔子が教えてシナ民族が二千五百年間学んできたことは、人間に求められるものとして、決して袖にされることはなかった。

ラーベは素朴な人間だった。実直な尊敬すべき(註、邦訳版は「伝統ある」としている)ハンブルク商人としての誇りをもっていたが、決してそれ以上であらうとはしなかった。救いの手をいつでも差し伸べる用意があり人に愛され、健全な人間の理性をもち、困難な状況の中でも、いや実になんかそういう時にこそユーモアを忘れなかった。日記で繰り返し言を書いたときも大抵はこう付け加えている。「でもほかの人たちだって同じような目にあっている」。あるいは「ほかの人たちにもっと酷い目にあっているのだ」。日記にはしばしば困難な状況にある人について書き、人々をどのようにして救うのか、あるいは救おうとしたのかを記している。そこに自分の使命を見いだしていたのだ。この点でラーベは他の同時代人に対して際立っていた。

ラーベにはドイツ人をはじめ、その他の外国人にも多くの友がいた。英語を流暢に話すことを我々はつとに知っているが、フランス語を書かせても正確だった。特にシナでの生活に関するたくさん本を書き、写真やユーモラスなイラストを添えた。ほとんどは私的な性格のもので出版されることはなかったが、きちんと製本された状態で置かれていた。シナの芸術については専門家ではなかったがかなり詳しく知っていた。文学や音楽、学問は彼の生きる世界(Metter)ではなかったが、情緒的な詩に涙することはあった。心優しかったがそれを人に見せるのを嫌った。ラーベはまた実務家であり、あらゆる実務的な面で手腕を示した。政治への関心は限られ、精々シナや、ドイツのシナ貿易、ドイツのアジア政策に関する程度のものであった。だが愛国者であり、ヒトラーが平和を望んでいると信じて疑わなかった。



一九三四年ラーベは南京の自分の土地にドイツ学校を設立した。といつても彼の二人の子どものためではない。娘はとうに学業を終えていたし、息子は南ドイツの寄宿学校へやっていた。この学校の理事長として教師や運営資金をドイツ当局や党に仰がねばならなかったため、彼はこの年一九三四年にナチ党(国家社会主義ドイツ労働者党)に入党した。

彼が素朴で、彼の健全な人間の理性、彼のユーモア、彼の社交性によつてどこでも人から評価されるのに、それでいて特に目立たない人物が一番身近にいる者、シナ人の同僚への愛から、彼らが最大の困難にあるときにわが身の殻を破つて、サマリア人(訳註、献身的に奉仕する人)のようにそこで救いの手をさしのべただけでなく、疲れを知らずに日夜活動し、政治的な慎重さ、組織力、外交手腕を発揮し、いたるところでどのようにして絶賛を浴びたのか。またアメリカ人の仲間と力を合わせ、しばしば生命を危険にさらしながらも、日本軍の占領期間中の南京で比較的安全な地帯をこしらえ、二十五万人のシナ人を虐殺(Massaker)から守つたのである。しかも日記をつけるだけの余力をもちあわせていたことは信じられないことだ。一九三七年十月から一九三八年三月までの半年間に、ラーベが何をし、何を書いたか、本書のテーマはそこにある。

ラーベは友人たちに高く評価され、シナ人からは聖人のように崇められた。またその不当な侵害に対して抵抗し続けたにもかかわらず、日本人からも尊敬されていた。それでいてなお謙虚さを失わなかった。だがひとたび不当な行為に接するや、たちまち日頃の柔和さ謙虚さを忘れた。女性を暴行しようとして兵士を見ると、甚だしい怒りからかれてドイツ語でどなりつけ、鉤十字をその鼻先につきつけ首根っこを押さえて外に放り出した。また聞くところによると、家庭内でも父としての権威にこだわつたという。

彼は謙虚ではあつたが、時には小さなうぬぼれが見え隠れする。たとえばベルリンの著名なカメラマンの前で

タキシードに身を包み、あらゆる勲章をつけてポーズをとっているとき。あるいは上海の地方紙「東アジアロイド」の編集者が、ラーベが誇りにするジョークをあつさり削除したときなどは傷ついた。

ラーベが去った一九〇八年、ドイツはまだ皇帝ヴィルヘルム二世の時代だった。一九一九年短期間帰国したときには、ドイツ帝国は共和国となっており政情は不安定だった。ハンブルクで共産党が市庁舎を占拠したとき、ラーベはいかにも彼らしく暴徒に倒された男性を助け起こそうとして殴られた。

ベルリンでジーマンスのストライキがあつたとき彼は町で機関銃を見た。そして日記をつけ始め、これに情熱を注ぐようになった。だが妻にとつてはかならずしもうれしいことではなかつた。その後は仕事から帰つたあと、もひとりで机に向かつていることが珍しくなかつたからである。こんな不安な毎日では日記を紛失してしまうのではないかと、彼は幾度も書いている。日記はラーベにとつてかけがえのないものになつていた。そのなかに彼の時代と人生が昇華していったのだ。

### 〔比較と研究10〕

右の(二)のヴィッケルト版の『序文』に「句点」を付した箇所は(四)の邦訳版の「ラーベの日記とその時代」(九頁〜十八頁)にはあるが、(一)の一九三八年の『敵機』にも(二)の一九四二年の『爆撃』にもない。

邦訳版の「ラーベの日記とその時代」(九頁〜十八頁)はヴィッケルト版からの訳で、本稿はその邦訳版を参考にした。邦訳版が改変ないしは削除した箇所は「傍線プラス句点」で表示した。なおヴィッケルトはラーベが右のように「二十五万人のシナ人を虐殺(Massaker)から守つた」と言つたが、城内の人口は陥落数時間前が二十万で陥落一ヶ月後は二十五万というラーベ委員長の公的発言と矛盾するのではないか。また仁を説いた孔子の教

えとは逆に、中国共産党はチベットで四人に一人を消すという犠牲者一二〇万の「ジェノサイド的殺戮」<sup>①</sup>をおこなっている。中国共産党による統治形態としてのテロルの死者は「六五〇〇万」<sup>②</sup>を数えたのである。

註1、ステファヌ・クルトワ／ジャン＝ルイ・パネ／ジャン＝ルイ・マルゴラン著『共産主義黒書——犯罪・テロル・抑圧——』(高橋武智訳、恵雅堂、平成十八年)二二二頁。

註2、ステファヌ・クルトワ／ニコラ・ヴェルト著『共産主義黒書——犯罪・テロル・抑圧——』(ソ連篇)(外川継男訳、恵雅堂、平成十三年)一二頁。

ともあれ次はヴィッケルト版が引用するラーベが別に書いていた日記である。

次にきたのがカップ一揆だった。私はドイツ国内の政治のことはよく知らず、理解できなかった。後になつてようやくはつきりしたことは、当時の時代は私に見えていたよりもずっとひどいものだった。左を見ればシユタイン広場の音楽ホールに帝国陸軍が陣取り、右を見ればウーラント通りの乗馬教習所に共産主義者が宿泊し、夜になると撃ち合うが始まるので私は家族と一緒に寝室を抜け出し、廊下で寝なければならなかった。ベルリンは実に居心地が悪かった。当時はゼネストと昔とつた杵柄(きねづか)(Technischen Nothilfe「技によるしのぎ」)の必要な時代で、飢えた学生が女のヒモになり、オペラ歌手が裏庭で物乞いのため歌う時代だった。惨めな買いだめの時代(Hamster-Eisends)であった。当時はスペック社の地図(Speckkarten)とジーマンスホールには軍靴がびびく時代だった。私は会う人ごとに道を尋ねた。ブレンデル氏やジーマンスの友人や同僚たちが、安い豆を売るジーマンスシユタット内の店を教えてくださいました。大きな二つの紙袋にえんどう豆をいっぱい詰めて家にもつて帰ろうとしたが、雨が降り市電も通つていかなかった。袋がふやけて豆は半分しか持つて帰れなかった。まったく私に

はベルリンは何一つ向いていない！

私は市電の中で癩癩の発作を起こした少女に食事を分けてあげた。彼女の胃袋は空っぽだったのだ。思い出すのは毎日出遭う貧乏のもうひとつの極端な例だ。上海の経理係のブラウン氏が休暇から戻ってきて、ブレンデル氏や私、それに何人かの友人をポツダム広場にあるプシヨル・ビアホールに招いてくれて、ビールと、彼が故郷のバイエルンから持ってきた食べ物、白パン、バター、ソーセージをいただいた。我々は皆生き返った気持ちになり、ブラウン氏は残った食べ物を八歳ぐらいの少女に贈り物としてあげた。少女はエプロンに一個一マルクのマツチを入れて売っていたのだ。少女はマツチを皆落とし、大声で泣きながら宝物をもつて自分の家の戸口で待っていた母親の元に駆け出していた。ホロ酔い気分はすっかり失せてしまった。

私にまた元のシナの職場に戻つてよいと知らせがきたとき、ホッとため息をつくことを誰が咎め立ててきようか。

### 〔比較と研究Ⅰ〕

右の(二三)のヴィッケルト版に「句点」を付したカップ一撰にかんする箇所は(二)の一九三八年の『敵機』にも(二)の一九四二年の『爆撃』にもない。一九一九年にラーベがベルリンに一時帰国していた時期にラーベ自身が別に日記で書いた思ひ出(ヴィッケルト版S11~S12)であつて、ヴィッケルト版はこれを収録しているが、邦訳版の「ラーベの日記とその時代」(九〇十八頁)には訳出されていない。

次の二十年の間にラーベは二度短期間ドイツに滞在した。一度は一九三〇年で、彼がいうにはインフルエンザ

(Kopfgrippe) の治療のためだった。その後でラーベはシナの新首都南京のジーマンスの経営に携わることになった。ラーベがドイツの地を再び見たのは、一九三八年三月で会社が彼の任期を終わらせ、帰国させた時であった。一九二七年以来南京はシナの首都であった。一九三七年当時人口は約百三十万人だった。ジーマンスは南京市の電話、発電所の発電機、ドイツの医療機器を備えた病院に製品を供給していた。ジーマンスが養成したシナ人技術者が管理した。毎日、ラーベは役所へ出向いては注文を取っていた。

南京にはドイツのホテルが一つあった。天津の有名製パン業者キースリング&バーダーが支店を出していた。トラウトマン大使の下のドイツ大使館が北京から南京へ移り、他国の大使館もあとに続いた。南京からはトランスオーシャン通信社がシナの政治について報道し、他方、上海は引き続き経済の中心地だった。ちょうどワシントンとニューヨークのような関係だった。

南京を統治していたのは軍事委員会委員長、すなわち蒋介石である。彼は発展が遅れていたこの国を統一近代化しようとしていた。当時のシナは私設軍隊を率いるたくさんおほくの指導者、所謂軍閥の勢力範囲と、毛沢東が有名な長征の後、周囲を囲った西安の地域に分裂していた。南京には三十人から四十人のドイツの軍事顧問が駐留していた。彼らはすでに退役した軍人で、家族同伴の者もいた。蒋介石は一九二七年にこれらの軍人を招聘し、個人契約で採用した。軍事顧問の役目は毛沢東の革命軍や日本軍に対抗できる精鋭部隊を作り上げることだった。一九三四年と三十五年の(註、邦訳版は削除している)軍事顧問団長は、かつてのワイマール共和国軍参謀総長の退役大将(Generaloberst)フォン・ゼークトであった。その後任はアレキサンダー・フォン・ファルケンハウゼン大将(General)がなった。彼らに養成された精鋭部隊は一九三七年秋には自分たちより強力な日本軍を相手に長期間持ち堪えた。

南京のドイツ人将校は自分たちだけで固まり、蒋介石が用意した居住区で暮らしていた。そこでは国にいと  
きと同じようにカジノも楽しめた。いずれにせよ大抵は二、三年の契約だったこともあり軍人たちはシナとい  
国や人々、文化、歴史などにはほとんど興味を示さず、それよりも個人の経歴や配置転換、任務、戦争体験など  
について語り合うほうを好んだ。政治的には全く異なつた陣営から来ていたので争い事がよくあり、フォン  
ゼークト大将は懲戒裁判 (Ehrengericht) を開かねばならなかつた。

長年シナから出たことがない南京の商人には祖国への道は遠かつた。ルフトハンザ航空の子会社のひとつであ  
るユウラシア社はシナにおける唯一の航空路線だったが、当時はまだ欧州やアメリカへの直行便はなかつた。上  
海からジエノヴァへの船旅はジエノヴァで下船し、大抵はさらに鉄道でドイツへ向かうが、それには四週間から  
六週間もかかつた。シベリア横断鉄道だと十日から十二日で行けたが大抵の人は船旅を好んだ。

一九三〇年が最後のドイツ滞在だったラーベにはその後のドイツの情勢については具体的なイメージがなかつ  
た。ヒトラーの全権掌握やレームの暴動、政治風景の根本的な変化についても新聞を通して知るだけだった。  
ラーベは上海で発行されるイギリス系の新聞「ノースチャイナデイリーニュース」を購読していた。これはシナ  
で最も上品で重要な英字新聞だった。その他「東アジアロイド」を定期購読していた。これも上海で発行されて  
いたが、情報は国営ドイツ通信社 (amtlichen Deutschen Nachrichtenbüro) や通信代理店トランスオーシャンか  
ら配信されたものだった。従つて編集は帝国宣伝省の言論統制下にあつた。

このドイツ語の小新聞はドイツやその指導者、その党に關していいことだけを報道しなければならなかつた。  
また「ノースチャイナデイリーニュース」にも時には目線の高い記事もあったが、一般的にはドイツとその政治  
についておおむね好意的に伝えていた。ドイツから送られてくる新聞は南京に着く頃には二、三週間たつていた

ので、面白くはなかった。それでもこれらの新聞も否定的なことは何ひとつ書いていなかった。ドイツで国民暴動がおこりドイツはヴェルサイユ条約の屈辱的な拘束を破棄し、これ以上賠償金を支払わず、一九一八年の敗北以来ふたたび他国と同等の権利を要求したというような報道をしていた。ユダヤ人はしばしば攻撃された。それがなぜなのか、宗教や人種や民族の異なる人間が日常的に関わりあっていたシナでは理解できなかった。ユダヤ人に対してドイツで実際にとられていた措置については、ドイツの新聞でも当初ごくまれにしか報道されなかった。ちなみに「ノースチャイナデリーニユース」も同じだった。殆どすべての外国の新聞はヒトラーの反ユダヤ政策はドイツ内政上の好ましくないテーマとして扱ったにすぎなかった。

ドイツの外交・経済政策、軍備、そして一九三八年以降は、ヒトラーの政策は戦争に通じるのではないかということのほうが重要になったのである。三〇年代末ドイツ系ユダヤ人がぞくぞくと上海へ亡命してきて、人々はユダヤ人に対する迫害を始めて具体的に知ったのだ。したがってその後はまったく気がつかなかったわけではない。

もう三十年近くシナで暮らしているジョン・ラーベには、シナはドイツ以上に(註、邦訳版は削除している)故郷だった。ラーベはあの伝説的な「シナ専門家」(Old China Hands)の一人だった。彼らはなまりのない英語を話す、シナ語はできずシナ人と話すときには英語にシナ語が混じったピジン英語しか使わないが、シナ人のようにものを考えることができ、彼らを理解し、評価し、愛していた。そしてこれらの古いシナ商人は自分たちが目の当たりにした歴史のエピソードや自分の経験や実例などの尽きせぬ泉であって、シナ及びシナ人の別の異なる側面(註、邦訳版は「異質性」としている)を具体的に説明できたのだ。しかし彼らが欧州に帰ると、すでに馴染みのなくなった故国の生活にふたたび融け込むのはむずかしかった。ジョン・ラーベもそういう一人だった。

た。

彼はよく客をもてなした。一九三六年秋アメリカのカレッジでの勉強を終えた私は、何でも見てやろうと日本と中国へ貧乏旅行をした。

〔比較と研究12〕

右は第三冊目の日記のヴィッケルト版の前置き『序文』で、「黒句点」を付した箇所は一九三八年の『敵機』にも、一九四二年の『爆撃』にもない。邦訳版の「ラーベの日記とその時代」（九頁～十八頁）はその訳を載せている。

〔比較と研究13〕

（一）に「一九三七年当時人口は約百三十万だった」と書かれているが、当時最も権威のあった『中華年鑑』(The China Year Book) 一九三八年版（一頁）も一九三九年版（一頁）も「南京 五九七平方キロ 一〇一万九一四八」と記載している。「百三十万」には根拠がない。

次はこの後に続く記述で、ヴィッケルト自身の体験談が記されている。

ヴィッケルト版の前置き——『序文』（続）

私は山東省で、一言触れる価値のあるクリッカーというドイツ人を訪ねた。この人はその土地に深く根を下ろしていた。山東省では当時すでに有名で、その後映画化で成功した上海急行 (Shanghai Express) 襲撃事件を起した脱走兵や強盗団が地域を不安にしていた。彼はシナの或る会社の傘下にある鉅山の責任者で、会社は大規模



な労働者のための社会施設を備えた事業を有していて、ドイツでも模範的企業と言えたのではなかっただろうか。彼は私にジョン・ラーベ宛ての紹介状を持たせてくれた。ラーベの家に宿泊すれば、シナについて多くのことが聞けるだろうというのだ。

十一月末の朝まだき薄明のなか私は鉄道で浦口につき、揚子江をフェリーで渡り、力車を乗り継いで南京城の圧倒的な重量感のある門をくぐって、ラーベの家に辿り着いた。ラーベの家は事務所を併設した控えめな邸宅だった。すべてがまだ眠りの中にあつた。私は通りを行ったり来たりして、ようやく朝食の時間になってからベルを鳴らした。

ジョン・ラーベと妻はすぐに三人目の食事を用意し、客間に寢床を敷いてくれた。私が始め予定していた時間よりも長く一週間以上も泊めてくれた。一度映画館に一緒に行き、アメリカを見た。しかし、それ以外は夕方居間でくつろぎ、ラーベはシナで過ごした歲月、シナ人のこと、シナ人の考えや態度、奇妙なシナ国内政治や、蔣介石政権や、腐敗のこと、ドイツの軍事顧問団について語ってくれた。しかもラーベは清王朝の末期の数年、悪名高い未亡人の西太后の時代、ドイツ帝国の保護区「錦州」や青島の建設を体験していた。

ラーベの話は具体的で、我々にはしばしば分かりにくいシナ人のことについて力説して説明してくれた。下男や彼らの家族の生活、シナにおける商慣習を彼の日記のなかからユーモア溢れる詩や観察を読んでくれた。まだテレビのなかった当時は話をする時間はたっぷりあつた。

私はアメリカ合衆国や満州旅行についてレポートを書かねばならなかった。日本の軍用車が北京の町ばかりか、シナ政府が治外法権を認めざるを得なかった領事館区域を傍若無人に走り回っているという私の話を聞いて、ラーベは怒つた。

シナ在住のドイツ人が皆そうであるように、ラーベもまたヒトラーは日本に接近していると心配していた。大使のヨアヒム・フォン・リッペントロップが、ロンドンで外務省の関与なしに誘なって署名した反共同盟がそれを証明していた。ヒトラーはドイツ人軍事顧問をシナから撤退させるだろうという噂を、ラーベは勿論信じていなかった。というのは、軍事顧問団はみなシナ政府と個人的に契約していたからだだった。

しかしヒトラーは一九三八年にそれを実行し、リッペントロップは顧問団とその家族に対してもし遅滞なく撤退しなければ「重大な結果」(crustan Folgen) を来たすと脅した。ラーベも私もドイツ国内の事情ですら殆ど話をしなかったし、二人にはドイツは遠い存在だった。ラーベがナチ党員で、一時的に地区指導者の参事官ラウテンシュラーガーの代理を務めていたことについて彼は語らなかった。彼は多分それは形式的なことで大したことではないと考えていた。私はそのことについてはずっと後の戦後になって聞いたのである。

ラーベ夫妻が私を受け入れてくれたのは感動的だった。私は山東で手持ちの金の一部を両替していた。しかし、南京ではどこもそれを受け取ってくれない。その金は北方軍閥 (Warlords) の通貨だったのだ。ジョン・ラーベが言うには、その通貨を使える通貨に両替してくれる銀行があるという。今考えてみると、ラーベがそのお金を自分の財布の金で工面してくれたのは簡単なことではなかったのだ。

ラーベ夫妻は私を車に乗せて、十四世紀の明朝初代皇帝の洪武帝の墓や中華民国創建者孫文の荘重な廟、その他の南京の歴史的記念碑に連れていってくれたり、あるいは私一人で街を歩かせてくれたりしたが、ときどき町の佇まいがわからなくなった。なるほど中心部には新しい大きな官庁の建物ができていて広い通りと広場があり、南京のドイツ人の言葉では「ポツダム広場」とか「ライプツィヒ広場」と呼ばれていた。しかし畑や湖、沼、灌木林があつて一軒の家も見当たらない広大な平地が広がり、そこも南京の一部なのだ。

紫金山、玄武湖、すべてが莊重な城壁で囲まれた岩のような「石造りの都市」。その城壁は明の初代皇帝が首都のために作らせていたもので、世界最大かつ最長で、二十万人が二十年（註、四年）かけて建設しなければならなかった。全長三十四キロ、或いは四十キロ以上（註、三十四キロ）という人もいるが、北門から市中を通つて南門までは十キロもある。城壁は明朝の初代皇帝が作らせたとき、市の中心からすでに随分離れていた。前線に守備隊が張りついている城壁は、占領するには全軍を投入する必要があるだろう。南京は城壁があつても何度も征服され、完全に破壊されてきた。最近では一八六四年である。そのときの破壊からまだ完全には立ち直つていなかった。

十九世紀の半ば、シナ南部の村の一人の村塾教師（註、洪秀全）が自らをイエスの弟であるとの幻想を抱いた。説教する内に彼は狂信的で革命的な信者を周囲に集め、その数を急激に伸ばした。間もなく彼らは完全な軍隊になり、北へ向かい彼らに対抗して送られた皇帝軍を撃ち破り、南京を占領した。「イエスの弟」は天の王と自称した。南京は「天の都」となり、その帝国を「大きな自由の天の帝国」、すなわち「太平天国」と呼んだ。現代風に言うならば原理主義的な神の国であり、同時に戦慄すべき独裁だった。太平天国の乱（一八五〇〜一八六四）の指導者たちは帝国全土を征服し、専制王朝の清を倒すことにほぼ成功したかに見えた。ところがやはり清帝国の皇帝軍は軍を立て直し、自壊する「太平軍」を長期に渡る戦いで倒した。世界史の中の最大の市民戦争で三千万のシナ人が太平天国の戦いで死んだ。一八六四年、清帝国の軍隊が南京を奪還した時、帝国軍は終日血に酔つて太平の暴徒のみならず、町の住民すべてを殺害（註、史上二度目の南京大虐殺）をして、家々を掠奪し、すべてをそれらを焼き払った。南京は陥落した。石造りのものだけが残った。ラーベの家を訪ねてから二十五年後、私は狂ったイデオロギーによって全国民を惑わした天王と天の自由な大帝国について小説を書いた。

青、緑、赤色の陶器製の大きな塔には百五十個の鐘が風に吹かれて鳴り、十五世紀初頭から世界の驚き(Weltwunder)であったが、太平の反逆者自らが既に爆破していた。「天王」が殺された宮殿の一部と小公園と湖が保存され、蒋介石將軍の公邸となっていて、当時は近づけなかった。

私はラーベがそういうので、一度町の城壁の回りを散歩した。城壁は高さ十六メートル(註、南門の中華門は高さ二十四メートル、南北の奥行き一二九メートル)、幅は最上部では十二メートルあった。町の門だけでも大きな要塞である。

多くの門(註、中華門のみ)にはそれぞれ内側に庭(註、二十七カ所の「蔵兵洞」があり、門が重なって造られていて、軍隊が一門を撃破してきてもすぐ新たな門の前に立たされることになり、そこで四方八方から戦わされることになる。城壁のてっぺんは車二台が悠々と並んで走れる広さだった。

城壁はさらに三分の二ある。ほとんど揚子江まで続いていて、そこは河幅一〇〇メートルで遙か南京を通過し、河口から一〇〇キロまでも上流に遠洋航路の船が航行できる(註、減水期には航行できない)のである。流れは大きく弧を描き、その弧の中で手で守られるように南京が横たわっていた。城壁から市内を展望することができ、眺めは木々の緑、草地、畑、沼地の中にかすんでいた。

城壁上で、背の高い草が目前に生い茂る中、子供の帽子が落ちていたのを見つけたので、それを拾い上げたが、すぐまたびっくりして落とした。子供の後頭部に置いてあったのだ。頭は半ば腐敗していた。最悪は大きな白い蛆(うご)がわいていたことだ。ラーベの妻が外出したときを図ってその話をラーベにしたが、ラーベは興奮した。

「上海ではそんなことは日常茶飯で、寒い晩に死んだ乞食の死体が朝になると通りに横たわっていることはよくあること。南京ではそんなことはない。我々のところではそんなことはない!」

ラーベは翌日朝、警察署長に電話した。一九三六年の末のことだった。それからおよそ一年後ラーベは日記に書いた。

「我々は文字通り屍を乗り越えていった。クリスマスの日、事態はいちばんひどかった。」

あの一九三七年の十二月、ラーベがそれを書いたとき、「彼」は実際警察署長だった、そう南京市の市長だったのだ。

それがどのようにして起こったかを、ラーベは日記に記した。次章からはその抜粋が続く。戦争の最中に清書し (ins reine geschrieben)、彼が作成した触れ書、大使館への手紙、公告、新聞記事、手紙、写真などの書類を収録した。実際守秘義務と公刊を禁じたゲシュタポ (Gestapo) から身を守るため、彼は清書の前書きで次のように書いている。

これは読んで楽しいというものではない。一見したところそう見えるかも知れないが、これは日記——事実の報告——であって、公表するためではなく妻とごく親しい親族のために書かれるか集められたものである。公表は明らかな理由から今はできないにしても、いつの日か公表が適切と思われることにでもなれば、あらかじめドイツ政府から公表の許可を得てなすべきである。南京安全地帯国際委員会が日本大使館に宛てた全ての報告と文書は、私が英語からドイツ語に翻訳したものであり、アメリカ当局との間の往復書簡についても同様である。

ベルリンにて、一九四二年十月一日

ジョン・ラーベ

## 〔比較と研究14〕

右の(三)のヴィッケルト版に「傍線プラス句点」を付した箇所は南京における編者自身の体験談(ヴィッケルト版S15～S21)となつてゐる。それゆえ以上の記述は(一)の一九三八年の『敵機』にも(二)の一九四二年の『爆撃』にも見られない。邦訳版の「ラーベの日記とその時代」(九頁～十八頁)もこれを載せていない。

## 〔比較と研究15〕

実に些細なことだが、ヴィッケルトも言うように、その当時の南京は首都とは言つても一八六四年の南京大虐殺の破壊から完全には立ち直つていなかった。一九三七年十二月に日本軍将兵が中山門から城内に入つて驚いたように、ヴィッケルトの言葉を以て言えば城内各地には畑や湖、沼、灌木林があつて、一軒の家も見当たらない平地が広がり、それでもなお「首都南京」であつた。趣味が高じて南京の地誌の生き字引的存在となつた軍医佐藤大雄の『南京の古蹟』(昭18)は、「左右の城壁の近くに行けば田園風景を満喫出来る」と述べている。池や沼は城内だけでも四〇〇余りあつた。南京は繁栄する商業都市ではなく、農村風景を満喫できる政治都市であつたのだ。正確に言えば、南京は「本来は要塞のための存在」であつた。そのため長く田舎のまま取り残され、その荒れ方はまことに寂しく、城内には南京要塞司令部、獅子山砲台、富貴山砲台、馬家山砲台、清涼山砲台といった軍事施設が威容を誇る「天然の要塞」の感があつた<sup>①</sup>。富貴山砲台から鶏鳴寺砲台の間の地下は「一万人も這入れるようなトンネル」<sup>②</sup>となつてゐた。このような城塞都市の城内に、果たして中立地帯としての安全地帯は可能なのか。これがのちに問題となるのである。

註1、佐藤大雄『南京の古蹟』昭和十八年初版、昭和四一年再版(自費出版)、三頁、一三三頁、二二頁。

註2、田辺平学「爆撃及び砲撃による被害」、中島敏雄編『上海南京の戦跡を訪ねて』日本ポルトランドセメ

ント同業会、昭和一三年六月、四〇頁。東中野修道『再現南京戦』草思社、平成一九年、一九五頁。  
〔比較と研究16〕

ラーベも言うように、寒い晩に死んだ乞食の死体が朝になると通りに横たわっているという悲惨な光景は（南京では見られなかったが）上海では日常茶飯であった。

「この富める都市（註、上海）ですら、すでに毎年、路上に数千の死体が集められた。……今年の寒波は異常に早く来襲し、翌朝には何百という凍死体が路上にころがっていた。しかも丸裸でだ！ 生き残った物乞いや無宿者たちが、わが身を凍死から守るために、死者はおろか瀕死の者からも、ぼろ服を身ぐるみ剥いだのだ」<sup>①</sup>。

このように上海がコリン・ロスの『日中戦争見聞記』には描かれているが、上海は「富める都市」と言っただけでは足りないであろう。上海の、特に共同租界とフランス租界は工場の林立する世界最大級の貿易港として、経済、金融、商工業、出版、映画産業の中心地であった。政治を除けばシナ大陸の心臓部であった、戦闘のない平和な上海に、それでも毎朝のように凍死体が出たのである。一九三九年の上海の遺棄死体はロスの言う「毎年……数千」では少なく、別の信頼できる記録によれば約七万三〇〇〇体であった。それでも前年に比べると約二万七〇〇〇体の減少であった。

これにたいして田園風景の広がる南京は上海に比べて格段に経済力は落ちたが、それでも（ラーベが「我々のところではそんなことはない！」と南京占領の一年前に力説したように）それから二年後の一九三八年に一人の餓死者も出なかった。それは国際委員会以上に難民救済に奮闘した日本軍特務機関と砲艦「比良」の隠れた功績であった<sup>②</sup>。

註1、コリン・ロス『日中戦争見聞記——一九三九年のアジア』講談社学術文庫、平成一六年、金森誠也ほか

訳、二二一頁〜二二二頁。同じく山本実彦『興亡の支那を凝視めて』改造社、昭和一三年、二八二頁。

註2、これについては東中野修道「砲艦比良の南京難民救援活動——土井申二『支那警備記念』」『亜細亜法学』第四九巻第一号、平成二六年。

〔比較と研究17〕

このようにヴィッケルトは、「一九三七年の十二月、ラーベがそれを書いたとき、……南京市の市長だった」と書くのであるが、その当時国民政府軍事委員会の顧問であったジョージ・フィッチも妻が述べているように「南京安全地帯の市長」<sup>(1)</sup> (mayor of Nanking Safety Zone) と呼ばれていた。そのことはいったい何を意味するのか、今後の研究課題であろう。

註1、Geraldine T. Fitch's letter to American Association of University Women, April 1, 1939, in Stanley K. Hornbeck Papers, Box Nr. 134, CA: Hoover Institution Archives, Stanford University.

ヴィッケルト版の前置き——『どのようにして始まったのか』

ヴィッケルト版の『ジョン・ラーベ』にはこのあと「原典について」の説明と「どのようにして始まったのか」という編者の歴史解釈が来る。そこでラーベの九月二十一日の記述に入る前に、それを紹介しておきたい。

一九三一年、日本軍は大した抵抗も受けずに満州を占領し、主権国家「満州国」の建国を宣言した。だが主権国家とは名ばかりで、実際には満州国は完全に日本の支配下にあった。清朝最後の皇帝溥儀が皇帝となった後も、それは変わることがなかった。それから数年後日本軍は北支の他の地域へと進軍した。一九三七年七月初め北京



南郊の橋、所謂蘆溝橋で中国軍との戦闘が起ったが、初めのうちは重要な事件だとは思われなかった。

しかしこれは中国全土の征服をめざす日本の侵略戦争の始まりだった。国際法上つねに両国は事変、すなわち「突発事件」という言葉を用いた。日本軍が南京漢口を始めとする他の地方を占領しても、それは変わらなかった。従って外交関係の断絶には至らなかつた。南京の日本大使館は南京の町が日本軍に占領されてからも又国民政府がまず漢口に次いで重慶に撤退してからも、地位は低下したとはいえ、役割は変わらなかつた。大使自身は上海に居住していた。

夏には南京はたえがたく暑くなる。この町は漢口重慶と並んでこの国の「三大籠<sup>かまど</sup>」に数えられる。それゆえラーベの妻のドーラはもう暑くなると天津の北の北戴河の海水浴場に旅した。ラーベも八月末には加わった。彼は次のように記している。

秦皇島は当時すでに日本軍に征服されていて、高射砲を装備した日本軍部隊がとぎれることなく天津に向かつて行進していく。ちよつと深刻な気分になった。どうやら事態は私が想像していた以上にだいぶ深刻じゃないか！

北戴河は秦皇島から一時間ほどだが、ずっと前に日本軍に占領されたとは少しも感じられなかつた。しかし空気がどことなく張りつめていた。そのため直ぐに上海行きへの切符を秦皇島で手配することにした。答えは「二か月間は満席」であつた。それでも何とか一番早く帰れる方法はないかと思案していると、上海が日本軍に攻撃されたのでこの港を経由して南京に行くのは当分見込めないとの情報が入つてきた。

さてさて困つたものだ。しかしそれから南京が日本軍機に見舞われ酷く爆撃されたという報告が伝わつてきて、事態の深刻さを十分に認識した。今やもう海路天津から芝罘<sup>(Chefoo)</sup> または青島へ出て、そこから鉄

道・で・済・南（Tsinan）を・経・由・し・て・南・京・に・行・く・し・か・方・法・は・な・か・つ・た。一・九・三・七・年・八・月・二・十・八・日・に・夜・霧・の・な・か・を・妻  
と・別・れ・た。

一・九・三・七・年・九・月・七・日、平・時・な・ら・四・十・時・間・で・帰・れ・る・と・こ・ろ、ラ・ー・ベ・は・十・一・日・間・の・旅・を・終・え・て・南・京・に・到・着・し・た。  
妻・は・北・戴・河・に・残・し・て・き・た。南・京・で・空・襲・の・危・険・に・晒・し・た・く・な・か・つ・た・か・ら・だ。彼・女・は・次・の・数・カ・月・間・北・支・に・残・つ・て、  
そ・れ・か・ら・上・海・に・移・動・し・た。

〔比較と研究18〕

右の(二三)のヴィッケルト版の『どのようにして始まったのか』に「句点」を付した箇所は(一)の一九三八年の『敵機』にも(二)の一九四二年の『爆撃』にも見られない。ヴィッケルト版(S27f.)にあるのみで、従って編者ヴィッケルト自身の文章である。邦訳版の「迫りくる砲声」(二十一頁)の冒頭にも訳されており、この部分の訳出に際しては邦訳版をほぼ踏襲している。

〔比較と研究19〕

このようにヴィッケルトは「上海が日本軍に攻撃された」と言うのであるが、上海の欧米人ジャーナリストはそれとは違った認識をしていた。そのことについては本稿六十五頁において詳論する。

〔比較と研究20〕

ヴィッケルトが「南京の大使館は地位が低下したとはいえ残った。大使自身は上海にあった」(Der Botschaft in Nanking blieb, wenn auch in niedrigen Rängen. Der Botschafter selbst residierte in Shanghai.)と述べているので、少し補足説明をおきたい。

明治三十四年（一九〇一年）に上海日本総領事館分館として発足した南京の日本外交機関は明治四十年に独立して南京日本領事館となり、昭和七年に総領事館に昇格した。一方、南京の公使館はその創設期を確認できないが、昭和十年に大使館に昇格し、大使はほぼ国際都市の上海に在って外交関係の改善に尽力していた。シナ事変から約一カ月後の昭和十二年八月十六日に総領事館も大使館も南京から一時撤退するが、昭和十三年には総領事館が、昭和十五年には大使が赴任している。<sup>①</sup>従って陥落後の南京にいた外交官は上海からの出向であった。

註1、市来義道編『南京』南京日本商工会議所、一九四一年、六三五頁〜六四一頁。

これで九月二十一日の日記の前に置かれていた前置きを紹介し終えたことになる。そこでこれからいよいよ日記の異同について検討していきたい。いよいよ以下に訳出するのは（一）の一九三八年の『敵機』からである。

九月二十一日

こうして書いている間にも我が家族は又もや地球上に見事に散らばっている。まるでお互い関係などもちたかないかのようだ。オットーからの最近の手紙はロイトリンゲンの消印があつて、彼は今在外ドイツ人のコースに参加していて勤労奉仕の命令を受けていた。今日あたりはシュトゥットガルトか又は再びグラスポイエンの兵舎にいるのだらう。ウイリイは、オットーが旅の途中の鉄道駅のどこかで六年振りに二、三分間だけ会つたというが、おそらくまだチュービンゲンの熱帯医学研究所にいて検査と治療を受けるのがよいと思う。ウルシとグドルンをつれたグレートルはもう猩紅熱は直つたと思うが、ビュンデ（ヴェストファールン）のウイリイの両親の元にいる。ママは北戴河が確かに寒くなつたので天津へと引き上げた。私はママと八月四日から二八日まで一緒に

いたが、日本の戦争のため彼女はそこに残して行かねばならなかった。北部前線を迂回して、天津、芝罘、青島、済南經由で、いつもなら鉄道で四十時間のところを十日半も旅して南京に帰ってきた。南京はその間にもう日本軍機に激しく爆撃されていて、そのため大抵の女子供は町を去っていた。私は九月七日に再び南京に到着して、九月十九日と昨日二十日には日本軍機の四度の激しい砲撃の洗礼を経験した。砲撃が最も酷かったとき私はシナ人と一緒に自分たちで作った地下室にいた。そこは爆撃に耐えられる造りではなかったが、それでも榴弾の炸裂や砲弾の破片からは守られていた。さらに庭には六メートルと三メートル四方の帆布を張って、それに鉤十字の旗を描いた。大愛好都合だったのは、政府が警報装置を設けていたことだ。空爆の二十分から三十分前には大音響のサイレンが鳴り響いて、それを合図に歩行者は素早く通りから消えたに違いない。そのときは行き交う車も止まった。歩行者は地下壕に潜り込み、すでに述べたように地下壕はたとえ急場凌ぎのものであってもどの通りにも作られていた。地下室の中の時間はそこにいるだけでもう不快だった。

### 〔比較と研究21〕

右の(一)の一九三八年の『敵機』に「読点」を付した箇所は(二)の一九四二年の『爆撃』にはなく、従って(三)のヴィッケルト版にも、(四)の邦訳版にもない。また最後の傍線を付した箇所は、(二)の一九四二年の『爆撃』にはあるが、ヴィッケルト版にはない。従って、邦訳版にもない。

昨日、九月二十日、上海の日本軍司令官の警告がドイツ大使館を通じて届いた。本日九月二十一日正午から南京空襲を再び強化しておこなうので全ての外国人は速やかに首都を離れるようにとの警告であった。それどころ

か日本軍は揚子江上の下関シヤートウに軍艦を遊弋させている英、仏、米の大使館やいくつかの小国に対して現在の係留位置から更に上流ないしは下流へ碇泊するよう求めて、さもなければ爆撃の危険に晒されることになって万が一被害にあっても日本は損害賠償しないというのだ。

その結果はと言うと——。英仏は回答の中で、両国の船舶の停泊位置を変える理由は見当たらないから、もし英仏の財産や英仏籍の人々が害せられた場合は日本に責任があるのは明らかであると表明した。これに対して米  
国大使は大使館員を米国軍艦「ルソン」に乗船させて、場合によっては日本の忠告に従うつもりである。勿論「ルソン」は目下のところまだ下関から動いてはいない。イギリス人やフランス人の例は確かに危惧される。(英雄的行為は感染するのだ！)

ドイツ大使と大使館員は今朝早く九時に上海に向けて出航した。同じく多くの米国人やドイツ人(例えば、シユレーダー博士や、フォン・ヒルシユベルク博士の家政に係わる婦人たち、ハプロ社の社員の一部)も警告を真剣に受けとめて、一部は車で上海へ、一部は船で漢口に、あるいは列車で済南青島へと逃げた。

私自身はといえば昨晚、この状況をあらゆる角度からじっくり考えてみた。私が安全な北戴河からここへ戻ってきたのは冒険心からではなく、第一に私の財産を守るためであり、ジーマンスの利益を代表するためだった。勿論、会社は私がか社のために命を投げ出すと期待することはできない(会社もそうはしない)。さらに私の命を、何か物的な価値のために、例えば、会社のためとか、私個人の少々がらくたの持ち物のために賭ける気などさらさらない。しかし、そこには私が名誉あるハンブルク商人として、これまで飛び越えられなかったひとつの道義的な点がある。総勢約三十人からいる我々の身内のシナの下男や従業員は「ご主人様」だけを見ている。ご主人

様が留まれば、彼らは忠実に最後までその部署にとどまっているし（私はそのことは以前の北部の戦争でみてきた）、ご主人様が走っていったしまえば、会社と個人の家は荒らされるだけでなく、多分掠奪もされるであろう。掠奪はいやなもので、そういうことは考えないとしても、今日まで人々が私にしている信頼を欺けるものではないと心に決めている。平時なら、ろくでなしとしてお払い箱にしまうような者でさえ、人を信じているというのは胸を打つものがある。助手の韓（Han）が私から給料の前借をした。その金で安全のため彼は細君と二人の子供を泰安（Tainan）へ送ることができた。彼は率直に告白している。貴方が留まるなら、私もそうします。貴方が行けば、私もついて行きます！ 他の貧乏な下男たちも大部分はやはり北部の出であるが、ただどこへ行ったらいいのかわからないだけなのだ。私なら少なくとも婦人たちと子供たちを連れて行きたいが、男たちには旅の資金を与えたのだが、どうしたらいいのかわからないのだ。彼らは彼らの故郷の北部へ行きたいのだが、それも戦争なので、私の周りに集まっている。こういう状況のなかで、私が行ってしまうことができるのか、行つてよいのか？ 私はそうは思わない！ 誰か一度、空襲の際に何時間も地下室に座つてその手で震える子の手を握れば、その気持ちがわかるというものだ

### 〔比較と研究22〕

このように（一）の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は（二）の一九四二年の『爆撃』にはあるが、（三）のヴィッケルト版では削除されている。従つて（四）の邦訳版にもない。逆に、（二）の一九四二年の『爆撃』は（一）の一九三八年の『敵機』にはない次の一節を挿入する。

「それに、結局のところ、私の心の奥底にはここに残り、ここで耐えぬくべきだ、という強い思いがある。私はナチ党の黨員だ。しかも、支部長代理さえつとめたことがあるのだ。わが社の得意先は中国の役所だが、仕事で訪れるたびに、ドイツという国、それからナチ党や政府について尋ねられた。そういうとき、私はいつもこう答えてきた。

いいですか……

ひとつ、我々は労働者のために闘います

ひとつ、我々は労働者のための政府です

ひとつ、我々は労働者の友です

我々は労働者を、貧しき者を、見捨てはしません。

私はナチ黨員だ、だから、私が言う労働者とは、ドイツの労働者のことであって中国のではない。だが、かれらはそれをどう解釈するだろうか？ この国は三十年という長い年月、私を手厚くもてなしてくれた。いま、その国がひどい苦難にあつているのだ。金持ちは逃げられる。だが貧乏人は残るほかない。行くあてがないのだ。資金もない。虐殺されはしないだろうか？ かれらを救わなくていいのか？ せめてその幾人かでも？ しかも、それがほかでもない自分と関わりのある人間、使用人だったら？」

〔比較と研究23〕

右の「破線」を付した文章は(一)の一九三八年の『敵機』にはなかったが、(二)の一九四二年の『爆撃』に挿入され、(三)のヴィッケルト版にも踏襲され、(四)の邦訳版でも訳出された。ここではその邦訳版を引用

している。

ところで、私がない間、シナ人たちが自分たちで掘り、崩れる寸前だった泥だらけの地下室を掻きあげ (aufgekraht)、天井もきれいに (pikeln) 造り直した。梁を強化し、地面に床板をはり、上質の土嚮袋を出入口の壁の一部になっているように直角に置いた (空の土嚮袋は既に一袋十ドルもする)。そのとき、内側の梁の本が壊れそうになっているのを確認したので、労を厭わずに別の梁に替えた。昨晚は三分の二はそんな作業だった。それからさらに二つの入口の前には、爆弾が破裂したときの爆風を逃す特別なバリケードを設けた。家の葉箱と、一時閉鎖したドイツ学園のそれを地下室に持ち込んだ。毒ガス攻撃を受けた際の酢酸包帯 (Essigbinden) も備えた。飲みものと食べるものは、早々と今日の十一時から籠と魔法瓶に入れて用意しているが、考えてほしい、今はもう午後二時半なのだ。日本兵のいたずらどもは来ないではないか！ (Ham se Worte?) <sup>1</sup> 恐しい警告で驚かした後だということにこんなことがあるのか？ いたずらどもは、この頑丈な地下室が用意されているからといって襲ってこない、なんていうことは有り得ないと思っただので、ラジオをつけた。・・・上海は雨と、確認した！

それが理由なの・・・？ まあ、どうでもいいや、あせったりはしない、彼らが遠くにいるなら、どっちにしたらって面目まるつぶれだ、腹はすわった。だが、そう強がってみても、不安は消えない！

#### 〔比較と研究24〕

このように (一) の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は (二) の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三) のヴィッケルト版では削除されている。従って (四) の邦訳版にもない。



訳註1、「Hann se Worte?」は北ドイツ方面の訛りで、「Haben Sie Worte?」(そんなことあり得るの)という驚きを表す表現である。

九月二十二日

今回は実は私の体面の問題ではないのだが、また面目を施すことになった。しかも日本軍は空襲を強化すると予告していたその空襲を今日始めたのだ。つまり一日遅らせたのだ。朝の十時半から午後の十二時十五分までと、午後一時十五分から二時半まで又もやほんとうに酷く爆撃された。私の家に食事招いていたクラインシュロツト (Kleinschrod) 氏のほか二十三人ほどのシナ人に地下室にうずくまってもらったが、そのうち十四人以上は個人的な面識もなかった。知っている人のなかには近所の靴屋もいたが、彼とは靴の価格について一度もすんなりと一致したことがなかった。知っているのは彼は下男用の靴の型取りの費用をかなり多く見積もってくるからだ。しかし私はとにかく目をつぶっている。私の地下室は他のどこよりももうけ口ではなく、彼は今ある一人のドイツ人のたてた噂の渦中にあつたので、じつと我慢せねばならなかった。今日は五、六回空襲があつた。シナ人たちは皆静まり返って、クラインシュロツトと私が話をしなかつたら一言も地下室には響かなかつただろう。次第に戦争慣れしてきたというのならよいのだが、今回は全くそうではない。突然急降下してくる飛行機の風を切る射撃音をいつも随分緊張して追いかけて、落下地点を秒読みしながら待っている。今日はそれが特にひどかつた。爆弾が多数落されたに違いない。とうとう私たちは数えるのを止めてしまった。大地は揺れ、一つ爆発すると間髪入れずに次の爆発が続いて、私たちが砲撃の直接の目標地点だという印象をもつたのだが、後で確認したところでは、それでも爆弾は少なくとも我が家からは離れたところに落ちていた。

## 〔比較と研究25〕

このように(一)の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は(二)の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三)のヴィッケルト版では削られている。従って(四)の邦訳版にもない。

合図が、それも長く続くサイレンが鳴って、二回目の攻撃の終了を告げると、それから私は車で町の中を走ってみた。日本軍は特に中央党部(Tsung Yang Dang Pu, Komingtang Partelbüro)を狙っていた。そこに、特に南京中央党部内演奏所(Central Broadcasting Station)の管理部和スタジオも置かれていて、朝早く未払い債務を取りにいくよう頼まれていた。偶々幸いなことに韓と私はこの訪問を済ませていなかった。もし訪問していたらまさに爆撃時にそこに居合わせていたろう。爆撃の跡を全部辿ってみた。シュレーダー博士の家から約二百メートルのところにも、もつとも氏は前日漢口へ車で行っていなかったのだが、直径六メートル、深さ二ないし四メートルの大穴が畑と墓地の区域に最初の爆弾で生じていたが、その外には損害はなかった。シュレーダーの家の西側は爆風で窓硝子が粉々に割れていたが、その他の損害は認められなかった。次の落下地点は碎石舗装された大通りの中山路のど真ん中、我々が「バイエルン広場」と呼んでいる十字路のところにあった。つまりドイツ大使館からはさほど離れていないところだった。この落下地点の穴もすぐに修復されたが、見たところ人が死んだ形跡はなかった。少し南へ下ってカルロヴィツの事務所付近、大通り沿いの空き地に爆弾でできた大穴があった。その後ろにある家が四、五軒、完全に穴だらけになっていて、特に天井がひどかった。人の命が失われたとは耳にしなかった。警報が鳴って、どの家もだいたい空っぽになっていたのだろう。中央党部(国民党本部)の入り口のすぐ西側は前より酷くなっているように見えた。交通学校(旧砲兵学校)に通じる道路の角はなく

なっていた。角の家は消えていた。その後ろは二個の爆弾で六軒ほどの家が市電（火の粉を撒き散らす蒸気機関車）の車体に掃き寄せられていた。大勢の人がすごい穴の周りを取り囲んでいた。シナ人の家の瓦礫の中から死体の一部が集められて、用意されていた棺桶に収容された。群衆は実に静かで、ただ背後で女だけが泣いているのが聞こえた。壊れた家の前に全く貧弱な防空壕が二つあって、そのお蔭で住民も被害を受けずに済んだ。中央党部には入れなかった。爆弾五個がそこに落ちて多くの人が死んだそうだが、何人なのかは知られていなかった。官庁の建物の後ろ、城壁の粘土の中に、国民党本部を狙った最後の爆弾が直撃弾となって地下室に撃ちこまれて、八人が死んだ。地下室から首を出して回りを見ていた女は頭が吹っ飛んでいて、なかった。ただ十才ほどの少女は奇跡的に助かったが、自分でもどのようにして助かったのか覚えていない。その子があちこち人だかりを走りまわっては体験を語っているのが見られた。その場は軍に閉鎖された。犠牲者のため紙銭（Opferpapier）が最後の棺桶の前でたった今焼かれた。

〔比較と研究26〕

—このように（一）の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は（二）の一九四二年の『爆撃』にはあるが、（三）のヴィッケルト版では削られている。従って（四）の邦訳版にもない。

〔比較と研究27〕

文末の「少女は……自分でもどのようにして助かったのか覚えていない」という一文のドイツ語原文は「sie weiss selbst nicht wie」である。直訳すれば、「彼女は自分でも何がどうなったのか分からない」となる。それに続けて、「その子があちこち人だかりを走りまわっては体験を語っているのが見られた」(Man sah sie von

Gruppe zu Gruppe laufen und ihr Erlebnis erzählen) と綴<sup>つづ</sup>られているのだが、邦訳版がこの二文を「へどうして助かったのか、自分でもわからない。とつてもこわかった」とくりかえしていた」としているのは、訳者の想像が加わり過ぎていないだろうか。

### 〔比較と研究28〕

この「Central Broadcasting Station」は九月二十六日の「日記」(本稿七十五頁)においても言及されているが、後述するようにラーベの記述には混乱があるため、ここで少しばかり説明しておく必要があるろう。

旅行ガイドブック『英文新南京指南<sup>①</sup>』の末尾に「97. Kuomintang Central Offices (中央党部)」という説明が出てくる。これがラーベの言う中央党部であった。位置関係は、中山北路を挟んで、その左側が最高法院で、その右側が中央党部となっている。そして、「南京のための放送スタジオがここに置かれている」(Radio broadcasting studio for Nanking is stationed here.) と説明されているから、中央党部にスタジオが併設されていたことは間違いないが、しかしそれはあくまでも放送スタジオ (broadcasting studio) であって、放送局 (Broadcasting Station) ではなかったのである。

一方、満州電信電話(株式会社)の杉山友勝の撮影した写真<sup>②</sup>の一枚に、「南京中央党部内演奏所」(傍点筆者)と書きされた写真が残っている。それが旅行ガイドブックの言う放送スタジオ (broadcasting studio) であった。とすれば、それは玄武湖に通じる玄武門と最高法院のほぼ中間地点に、すなわち城内に位置していたことになる。そこは城内の人口分布を表した「南京全境明細図」(一九三七年十一月)の示すように人口の稀薄な地域であった。他方、九月二十六日の「日記」に出てくる「Central Broadcasting Station」は後述するように城外(江東門)の「中央党部広播電台」であった。両者の区別がないという点でラーベの「日記」は不正確であり、城外の中央

党部広播電台にたいする爆撃が城内の放送スタジオにたいする爆撃であったかのような錯覚を作り出している。

なお杉山友勝は戦後松下電送機器の副社長などを歴任することになる写真電送（ファックス）開発の草分け的存在であった。当時は関東軍の依頼を受けて上海南京地方の通信施設の防空設備を、南京の城門陥落から約三週間後の一九三八年（昭13）一月一日から十日にかけて視察していた。このとき杉山は上海国際電台<sup>しんじよ</sup>真茹送信所、上海北停車場、南京中央党部内演奏所、富貴山砲台、鷄鳴寺防空司令部、首都電話総局、江東門の中央党部広播電台の一〇〇メートル鉄塔などを視察し、その写真を残している。

註1、Ralph A. Ward, *A Day-Or More in Nanking, China, 1936*, p.25.

註2、『杉山友勝写真集』（仮称、筆者所蔵）三頁。

#### 〔比較と研究29〕

地図を見れば、この中央党部内放送スタジオの直ぐ右手（東）に富貴山砲台と鷄鳴寺防空司令部が位置している。中央党部附近に落ちたという爆撃はこの富貴山砲台や鷄鳴寺防空司令部、ないしはその南の城内飛行場を狙った流れ弾の可能性も考慮に入れておく必要があるであろう。

#### 〔比較と研究30〕

上海の英国人が一八七〇年に創刊した比較的中立的な新聞『ノースチャイナデイリーニュース』の一九三七年九月二十九日号は南京九月二十二日発の「シナ人難民キャンプにもすごい死傷者」(Chinese Refugee Camp Pays Ghastly Toll)と題する記事を載せている。「第二波攻撃の際に南京の港町下関<sup>シヤウカン</sup>のキャンプに爆弾が落ち、一〇〇人以上の避難民が殺された」という。しかしそれはラーベすら記していないことであった。そもそも下関には難民キャンプが存在しなかった。このようなプロパガンダを国民党政府が盛んに展開していた例は『ノース

チャイナデイルーニュース』の九月二十四日号に出た南京九月十八日発の「非道な南京爆撃、死者八、負傷者三五」(Eight Killed, 35 Injured in Nanking Bomb Outrage)にも窺<sup>うかが</sup>える。これはその前日の爆撃による被害だと言うのであるが、そもそも日本軍機は九月十七日に南京を爆撃していなかった。九月に入ってから爆撃は九月十九日以降からであった。<sup>①</sup>

註1、内閣情報部編『週報』六一号、二五頁。

### 九月二十三日

今日は時折小雨のばらつくどんよりした天気で、空襲はなかった。聞くところでは現在アメリカ大使は大使館員と一緒に下関港で「ルソン」号に乗船していて、現在の停泊地点を離れないと決めたという。(以前言わなかったかな？ 英雄的行為は感染するのだ！) 英国大使もフランス大使も南京を離れるようにという日本軍の要請を初めから断固として拒否していた。我がドイツ大使もそれにならって南京に留まったそうだが、近郊(蕪湖?)に旅してまた戻ってきていた。キースリングパン屋(シエール氏)は新住宅街の元ハプロ社員の家に引越していたが、それもそこが特に安全とされたからなのだが、今や昨日の空襲ですっかり信頼度が落ちたため、そこで今日彼は新住宅街から引越した。どこに。それはまだ見つけ出していない。悪いことには、そのシエールがパン屋をやめてしまったことだ。もうパンがないのだ。ちょうど今国家資源委員会(National Resources Commission)の直訳)から英貨一五〇〇ポンドの注文を受けて帰宅する。全く悪くない。これだけ注文が戦争の最中にあるんだから。お金にはならぬ、敬意を受けるだけの成功でしかなかったとしてもだ。上海から大変丁寧な手紙が届いた。上海の幹部が私の健康と無事を案じてくれている。それによれば私は身の安全のためなら妥当

と思うあらゆる方法をとってよいとのこと。場合によっては南京をも離れる。実に有り難い！この手紙は嬉しかった。しかし私がここに留まれば戦争保険はいったいどうなるのか。その回答はこれからおそらく来るだろう。

〔比較と研究31〕

このように(二)の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は(二)の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三)のヴェッケルト版では削除されている。従って(四)の邦訳版にもない。

九月二十四日

いつもは太陽の明るい陽ざしを楽しんでいるのに、今は雲一つない快晴の空を物憂げに見上げている。よく晴れた日は今や日本軍の空襲を意味し、空襲とはできるだけ係わりたくないのだ。昨日は曇りだったので心配せずに済んだが、ラジオを聞いていると今日は日本軍の四十機の編隊がこちらへ向かっていると聞いていた。しかし途中でまた引き返したという。今日は雨が降り雲が低く垂れこめているから、これなら外に出ても問題はない！南京市民にたいする空襲はあらゆる国際法に違反しているとする全ての欧米人の抗議が新聞には溢れているが、これにたいして日本は平然としたものだ。以前も今も軍事的に重要な目標と建物しか爆撃していないし南京市民や友好国の欧州の臣民に害を及ぼすことを意図するものではないと答えている。とんでもない！爆弾はこれまでに大抵が軍事目標を通り越して市民の頭上に落ちていた。しかも確認できたように貧者の中の貧者(den Allerärmsten der Armen)に落ちたのは最悪だった。避難民の行列(Züge)や収容所(Lager)は特にひどく爆撃された。上海市民の同情をひいたのもそんなことからだ。最近も激しい爆撃を受けて地下室で長時間しゃがみ

こんでいるとき音楽でもちよつと聞いて気分転換しようとラジオ（上海の六〇〇キロヘルツ）のスイッチを入れ  
ると、ベートーベン（ベートーベン Bihovenと言っていた）の葬送進行曲をやっている。おまけに悪いことに  
は、「この音楽は上海葬儀社（Shanghai Funeral Directors）の提供によるものです」（This music is kindly  
dedicated to you by the Shanghai Funeral Directors!）ときた。これには参った（Can you beat that?）。

次に掲げる写真はシナに撃ち落とされた日本軍機で、ハプロ社のSSW投光器専門職員テオ・クラインシュ  
ロット（Kleinschrod）氏が撮影したものである。（註、次の二頁にわたってその写真が、更に又二頁にわたって  
新聞記事が添付されているが、本稿では削除）

### 〔比較と研究32〕

このように（一）の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は（二）の一九四二年の『爆撃』にはある  
が、（三）のヴィッケルト版では削除されている。従って（四）の邦訳版にもない。

### 〔比較と研究33〕

上海の六〇〇キロヘルツのラジオ放送は米国籍の「華美放送」であった。

### 〔比較と研究34〕

ラーベは「避難民の行列（Züge）や収容所（Lager）は特にひどく爆撃された。上海市民の同情をひいたのも  
そんなことからだ」と述べているが、それは勿論ラジオや新聞からの伝聞に基づく。そこで少し長くはなるが以  
下に上海戦を概観しておく必要がある。

蘆溝橋から一千キロも離れた上海の共同租界の日本人居住地区を攻撃したのは、京滬警備司令（南京上海警備



司令官)の張治中であつた。彼はまた国民政府軍の中樞奥深くに潜り込んだ共産党スパイでもあつた。<sup>(1)</sup>  
兵力十方を率いる張治中が共同租界の蘇州河の北側を警備する兵力約四〇〇〇の日本海軍陸戦隊を攻撃した八月十三日は、日本軍が戦争を始めるには「最も都合の悪い」日であつた。猛烈な「台風」が琉球付近に停滞し、桜島の南の鹿屋海軍航空隊は渡洋爆撃による救援を見送らざるを得なかつた。一方、シナ軍はそれを「絶好」の好機として攻撃を仕掛けてきた。

翌十四日の上海は暴風雨となつた。「朝来の烈風」<sup>(3)</sup>のなか日本海軍陸戦隊は空陸からの攻撃を受け、シナ軍機は悠々と日本海軍陸戦隊本部や軍艦出雲を攻撃し続けた。米国スタンダード石油のタンクを大爆発させ、数千人が避難する上海の歓楽街「大世界」にも爆弾を落として、一帯は阿鼻叫喚の地獄と化した。キャセイホテルの玄関前にも投下して、路上を死傷者の鮮血で真っ赤に染めた。瀕死の重傷者を前に、救援隊も思わず目を覆う大惨状となつた。更に上海の中心を流れる黄浦江に停泊中のアメリカ海軍の軍艦オーガスタス号と揚子江付近に停泊中のイギリス軍のカムバーランド号をも空爆した。<sup>(4)</sup>

シナ軍が自国民に戦争を仕掛けて無辜の民を殺傷したことは否定できない事実であつたから、のちに国民党宣伝部の副部長となる董顕光も戦後の東京裁判開廷中の一九四八年にシナの犯行と認めている。

「一九三七年八月十四日の午後遅く……数発の爆弾がシナ軍機から投下された。それらは黄浦江に停泊中の日本海軍の旗艦出雲を狙つたものであつたが、バンド(訳註、黄浦江河岸通)に近い南京路に落ちて、キャセイとパレスの両ホテルの一部を破壊し、多くのシナ人外国人を殺した。さらにもう二発が……エドワード路七に落ちて大世界という歓楽街の近くで二〇〇人以上の被害者を出してしまつた」<sup>(5)</sup>。(傍点訳者)

八月二十三日シナ軍機が再び共同租界を空爆し、南京路の先施公司(Sincere Department Store)と永安公司

(Wing-on Department Store) 附近に爆弾を落とし、それぞれ二百人の死者と負傷者が出た。それでも日本軍機が爆弾を投下したとシナ側は宣伝した。

「敵機暴行、昨日炸燬上海先施公司、死傷三百余人、情形甚慘」(国民党機閱誌『中央日報』八月二十四日)  
果たして日本軍機が爆弾を投下したのであろうか。ニューヨークタイムズの上海特派員がこの空爆から五日後に香港から記事を送った。

「上海の共同租界やフランス租界におけるシナ軍の無責任な空爆と無辜の市民にたいする殺害を阻止するため、軍事手段ないしは他の抑止力を提供することについて何らかの国際的行動が合意されるべきだというのは、上海の外国人領事や陸海軍高官の一致した意見である」(6) (傍点訳者)

それでもシナ側は日本軍機が爆弾を投下したかのように匂わして主張した。そのためシナの検閲を恐れる同特派員は再び香港から記事を送った。

「シナの検閲官は、ラジオや電信が伝えたニュースのなかの或る特定の事実と見解を攻撃してニュースの電信文を変えさせ、どの爆弾もおそらく日本軍機が落としたと、この地の外国人高官が疑っているように思わせようとしているが、それは明らかに真実ではない」(傍点訳者)

それでもシナの宣伝戦は止まなかった。そこで三度香港から決定的証拠が記事となって送られた。

「シナは責任を否定し、ミサイルは日本軍機からだったと断言する。しかしながら今や明確に確定されているところによれば、これらの爆弾は二回ともシナがイタリアから購入したイタリア製のものであった。アメリカとイギリスの当地の調査官はこの結論において一致しており、イタリアの高官もこれらの爆弾の産地を認めている。イタリア人も日本がイタリアからこのような戦時補給品を買ったことはないと言っている以上、これは決定的な

証拠のように思われる」(傍点訳者)

ラーベの言う上海における「避難民……爆撃」はシナ軍の仕業であったのだ。それを日本軍の犯行と喧伝したシナのプロパガンダを在支二十年のラーベは少しも疑わない。そこに一つの先入観があったと見てよいのであろう。

註1' Jung Chang and Jon Halliday, *Mao: The Unknown Story*, London: Jonathan Cape 2005. ユン・チャン／ジョン・ハリデイ『マオ——誰も知らなかった毛沢東』土屋京子訳、講談社、平成一七年。その第九章「Red Mole Triggers China-Japan War」(赤いモグラが日中戦争の引き金を引く)は「戦争拡大の影に共産党スパイ」と改題されている。その「赤いモグラ」とは張治中司令官のことであった。

註2' 海軍省海軍軍事普及部『南京上空の殲滅的空中戦』昭和十二年十月、三頁。Violent Typhoon on Way From Guann May Eyade Shanghai, *China Press*, August 13, 1937; Typhoon Will not Hit City; Danger Past, *China Press*, August 16, 1937.

註3' 神田計三編『支那事変写真実記』軍事教育普及会、昭和十三年、一〇六頁。

註4' 平賀甚四郎『支那大事変写真史』(成光堂、昭和一二年九月)巻末の陸軍省新聞班／海軍省海軍軍事普及部編「支那事変戦記——蘆溝橋より青島邦人引上まで」一五頁～一六頁。

註5' Hollington Tong, *China and the World Press*, p.97.

註6' Japanese Chamber of Commerce of New York, *The Sino-Japanese Crisis 1937*, p.22, in: *Records of the Department of State Relating to Political Relations between China and Japan, 1930-1944*, Roll 50, Washington: National Archives Microfilm Publications 1975.

註7' Ibid.

註8' Ibid.

〔比較と研究35〕

国際法は言うまでもなく市民にたいする無差別爆撃を禁止している。が、軍事目標に限っては爆撃を容認している。南京の軍事目標にたいする日本軍の爆撃は八月十五日、十九日、二十三日、二十四日、二十七日、九月十九日、二十日、二十二日、二十五日、二十七日、二十八日、十月六日、十二日、十九日、二十日から二十三日、二十六日、十一月十日、十一日、十五日、二十二日、二十四日、二十五日、十二月二日、三日、四日、八日、九日と、多数に及んだ。このうち九月十九日は「大挙南京を空襲」して「数十機を以て兵工廠（しょうくう）、憲兵司令部、その他軍事施設」に損害を与え、また最後の十二月九日は「敵軍に対し投降」を勧告している<sup>(1)</sup>。

註1、内閣情報部編『週報』六一号、昭和十二年一月、二三頁～二九頁。海軍省海軍軍事普及部編『支那事変に於ける帝国海軍の行動』（昭和二三年～昭和一五年、鵬和出版、昭和六〇年）五九頁～七六頁。

〔比較と研究36〕

八月十五日の第一回目の南京空爆については、今となつてはその理由が分りにくいであろう。少し長くはなるが、それが上海を「第二の通州」にしなかったという次の記録を紹介しておきたい。ここに言う「通州」とはその半月前の七月二十九日の通州虐殺のことで、以下に引用するのは南京陥落から八日後の昭和十二年十二月二十一日に上海に到着し、二十七日以降に南京を視察して、大晦日の三十一日に上海には帰着した警視庁建築課長石井桂の講演記録である。

「シナ事変が始りました経過を一寸申し上げます。本当に始りましたのは八月十三日でございますが、……十

三日に至りますと八字橋を始めとして既にシナ軍の不法射撃がどんどん始まったというのを聞きました。十三日は既にこの共同租界には敵の飛行機が悠々と飛翔するというような事がなお付け加えられております。……共同租界の人々は、軍隊ならびに領事館の指導によりまして、各々割り当てられました避難所に集合したそうでありますが、しかしながら非常に人心の動揺を免れることはできなかった、殊に婦人小児に至りましては、極めて何と申しますか取り乱しまして、これを鎮圧するに少なからず軍隊なり領事館、警察当局というものが骨を折られた、力をかなりその方に用いなければならなかったというのを付け加えて申されました。……そういう不安な状態の下におきまして、シナはなお盛んにその後もこの共同租界の上を飛んで参りまして爆撃をする。むしろ始めはシナ機の上空を飛ぶに任せましてヤキモキさせられておったそうでありますが、しかし十四日にはすでに暴風雨が始まりましたのですが、……十五日に至りますと、我が軍の渡洋爆撃隊が遠く南京を爆撃いたしまして、そうしてそれから後は盛んに各地を爆撃いたしました。そのためにかなり重囲に陥っておりますところの上海の状態もかなり軽減することができました。殊にこの近所に南市（註、上海のシナ人地区）の方の龍華鎮りゅうわちんに国際飛行場があります。そういう近所の飛行場から、この共同租界を狙っておった飛行機が、奥地を盛んに爆撃せられることによって、そちらへ派遣しなければならぬということになって、この方の共同租界を日中毎日爆撃することができなくなったということは、我が海軍の連日とりました爆撃が、上海をして、第二の通州にしなかつたということに、非常に力があつたということが言えると思っております<sup>(1)</sup>」

上海のシナ人地区「南市」の龍華鎮りゅうわちんにあつた飛行場から、シナ軍機が盛んに出撃して共同租界の日本人地区を空爆していたが、八月十五日首都南京の軍事施設が日本軍に空爆されるに及んで、シナ軍機は共同租界の空爆どころではなくなつた。南京救援に向かわざるを得なくなつた。お陰で、上海の日本人地区はシナ軍による無差別

爆撃を免れることになり、第二の通州にならずに済んだ、と言うのである。

註1、石井桂「戦闘の概要と偽装燈火管制による被害状況」、中島敏雄編『上海南京の戦跡を訪ねて』二頁。なお引用に際しては漢字を適宜平仮名に変え、句読点を付し、誤植を訂正している。

## 九月二十五日

雲一つないよく晴れた天気だ。だから空からの来客がたぶんあるだろう。紫金山が雲で覆われる時はその危険はない。雲があると敵も味方も山に激突する恐れがあるとアードーホルト (Aderholt) 中尉が私に言っていた。彼はそのことをよく知っていなければならないのだ。というのは彼は当地では収益を上げる事業の中心人物 (Seele der Buttergeschäft) なのだ。すなわち高射砲中隊を指揮している。

添付した『東アジアロイド』の記事によると、ドイツ大使のトラウトマン博士はまだ南京に残っているドイツ人の安全を講ずる準備に入った。大使がどうしようとするのか、私たちはみな実に緊張して聞かねばならなかった。昨日大使館でなされた話し合いでは大使は彼の計画を持って出席したが、それはそれほど悪いものではなかった。大使は英国ジャルデン社の蒸気船「クトー」号 (Kutwo) をチャーターした。チャーター料は私の聞くところでは一日千ドルであった。それが南京にいなくても済む限りのドイツ人を揚子江の上流に運んでいく、つまり危険地域から脱出するというのだ。が、直ぐにまた戻ってこられるよう、そう遠く離れた所へは行かないという。言われているように、いい考えだ。しかし残念ながら蒸気船までどうやって行けばよいのか、今のところはまだ聞いていない。そこまで我々を運んでくれる必要なモーターボートがないのだ。大使館の二人の館員、ヒュールターとホートは確かにモーターボートを持ってはいるのだが、それが今のところ動かない。モーターが

故障していて、時速二マイルしか出ないと私は聞いている。それじゃ流れを上って行くのは難しい。何とかランチが見つからなくてはならない。そのうえ「クトー」号はできる限り下関に、素早く人々が乗船できるよう外国艦船の近くに碇を下ろしているよう、手配済みでなくてはならない。

九月二十五日九時から午後七時半 蠟燭の灯りの下で

このように我々は来客をやり過ごしている。訪問客たちの態度の悪いことときたら、常識に反して長逗留していることから、もう明らかだ。すなわち――。

午前九時半から午前十時半まで

正午から午後二時半まで

午後三時から午後四時二十分まで

四時四十五分頃、それからもう一度間違い警報があった。昼食の時間は三十分(二時半から午後三時)しかなかった。それもシュトラッセル博士(Dr. Strassel)がお相手だった。博士は銀行に行く途中で私のところに駆け込んできて、それから丸一日私のところに留まらざるを得なかった。十一時から十二時まで私は鉄道部(註、鉄道省)にいた。そして Futuan 李と Wong と北漢契約(Pehan Kontrakt)について何とか手短に話ができた。四時二十分、韓(Han)氏と一緒に下関まで急ごうとした。発電所(E.W.)を訪ねるためであったが、二度も警察と軍とに追い返された。この町の下部(北部)はまだ警報が「全面解除」されていなかったからだ。発電所に少し被害が出ていたことは、警報のサイレンが突然もう機能しなくなつて警官が交差点で鐘を打つて信号代わりに行っていたことから分かった。発電所(註、下関の揚子江岸の「電灯廠」)に行こうと三度目を試みた際、エーメ(Oheme)大尉(Hsi Liu Wan)の所で行き止まった。新たな、勿論間違い警報に又もや追い払われたのだ。

それでも我々は辛うじて車で家にたどり着くことができた。午後五時、それから危険は実際すっかり去って、来客の下関訪問は成功した。発電所に爆弾八発が撃ち込まれた。その際、日本軍機が一機撃墜された。飛行機の残骸と日本軍パイロットの首のない死体が本部 (Zentrale) の背後に横たわっていた。発電所では一人も死者はなく、数人のシナ人苦力がガラスの破片で軽傷を負っただけであった。しかし更に発電所の門の前で婦人一人と子供一人が死んでいた。どこかの地下室へ避難する途中だったに違いない。建物は酷い有り様だった。爆弾が数発、見た目には二発にしか見えなかったが開閉 (切り替え) 装置の上の屋根とコンクリートの天井をぶち抜いて配電盤室 (Schaltraum) で爆発したため、開閉装置 (Schaltanlage) は完全に破壊された。ほぼ全ての事務室がやられて一部では三分の二が空っぽになり、室内の品々は木っ葉微塵となつて、残り三分の一のがらんとした長い事務室に爆風で吹き集められていた。二階の部屋の壁はむきだしとなつている。鉄筋コンクリートの柱だけはそのままだつていたが、勿論ところどころが割れたり曲がつたりしている。重い鉄製の T 型の梁桁 (T-Träger) はさすがに持ちこたえていたが、一か所だけ曲がついてた。ボイラー装置と我々のタービンは見たところ奇跡的に被害のないままで、ただタービン (一号機と私は思う) だけが南壁の近くにあったため幾らか巻き添えをくつたようだ。いずれにしても鋼鉄製の建物からタイや数本が吹き飛んでいた。機械室の床全体はガラスの破片 (一センチ位の厚さ) で覆われていた。ざっと建物を陳 (Chen) 所長や数人の技術者と視察できたことで、上海の我が社に対して私が技術者の派遣を要請して被害状況を視察してもらい、場合によっては助言と行動を以て援助してもらうことが取り決められた。発電所の迅速な再稼働が元帥 (註、蒋介石) にとって実に重要だったからだ。我々はしばらく暗闇の中に座っていた。しかし七時にはもう大通りの灯りがついた。どこから明かりはきたのか、まだ私には分からない。韓 (Han) は浦口の津浦線の中央送電所 (Lichtzentrale) からだと云う。



この町には多数の爆弾が落とされた。更に別の日本軍機一機が城内南部で高度三〇〇〇メートルから撃ち落とされた、たった今メルヒオール（カルロヴィッツ）が電話をしてきた。彼はワッツェルの家の屋根から撃墜を見物していた。

〔比較と研究37〕

このように (二) の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は (二) の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三) のヴィッケルト版では削除されている。従って (四) の邦訳版にもない。

〔比較と研究38〕

発電所 (Elektrizitätswerk) はともに城外の下関と上坊門に存在した。その一つ、港町下関シヤーカーンの揚子江岸の「電灯廠」シヨウは軍事施設として利用されていたため爆撃された。南京陥落後の一九三八年二月、南京特務機関は、「下関発電所は軍事施設として利用せられるため、昨年九月二十五日爆弾一コを投下せられたるも、幸いに機械の主要部 (ボイラータービン) に損傷なかりしたため、内線を切り替え十二月十二日まで運転を継続せり。上坊門発電所は損傷なし」と記している。

註1、東中野修道校訂「南京特務機関報告」(東中野編著『南京「虐殺」研究の最前線』平成十六年版、展転社、平成十六年) 一〇四頁。

〔比較と研究39〕

上海の『ノースチャイナデイリーニュース』の一九三七年九月二十九日号は南京九月二十五日発の「日本軍機再び南京を爆撃」(Japanese Raiders again Bomb Nanking) を載せている。記事は匿名だが、右のラーベの「日記」

と同じ日の記録であるため両者の比較が可能となる。次が興味深い。

「ちようど人々が待避壕を出て昼食に行ってもいいと思ったそのとき、多数の日本軍機が再び午後二時に南東から現れて多くの爆弾を発電所と放送局の近くに落とした。今朝爆弾二発が下関のメッサーズバッテリーフィールド & スワイアーズ碼頭と、一発が英国人所有の祥泰木工の敷地に落ちた。いずれにおいても負傷者はなかった」(1) (傍点筆者)

爆弾が揚子江岸の埠頭と祥泰木工 (China Import & Export Lumber Co.) に落下したというのである。その祥泰木工は中山北路沿いと秦淮河の交差する地点にあり、電灯廠 (英語表記では Nanking Electricity Co.) と挹江門のちようど中間に位置していた。日本の海軍省水路部が作製した詳細な『南京港』という地図によれば、周囲に建物は見当たらない。(2)

ラーベは九月二十五日の「日記」に「発電所の門の前で婦人一人と子供一人が死んでいた」と記すのであるが、この記事は「負傷者はなかった」と記す。どちらが正しいのであろうか。はつきりとした公表の予定の立っていない、それゆえいつ人目に触れるか分からない日記よりも、直ちに多くの人の目に晒される新聞記事の方が正しかったと言えよう。記事は更に続けて「日本軍機は南京の給水施設と発電所に甚大な打撃をもたらした。そこが明らかに爆撃の目標であったからだ」と記す。が、ラーベはあくまで「南京市民にたいする空襲」(九月二十四日)の延長線上にあると曲解して解釈する。「本日の死傷者はこれまでのところ確認されていないが、約一〇〇人の市民が死傷したと言われている」という新聞記事の未確認情報ないしはプロパガンダに依拠していたようだ。

註1、Japanese Raiders Again Bomb Nanking, Terrific Explosions Mark Three Visitations of Crowded Areas: Four Invaders Claimed Shot Down, *The North China Daily News*, Sept. 29, 1937.

註2、一九二二年から一九三五年の中華民国海図から作成された海軍省水路部（東京）作製『南京港』（昭和二年）に基づく。

九月二十六日

チエツ、悪魔大王め、午前二時半だというのに叩き起こすとは。電気警報のサイレンが又もや鳴り始めている。そうこうするうちに私が確認できたことは、浦口（Pukow）の津浦線の発電所が南京の送電網に接続されたのだ。素晴らしいことだ。私の家でも灯りが点いた。今朝早く、午前二時半には勿論まだ暗かった。だからネクタイはつけずにパジャマとナイトガウンで地下室に下りたが、そこはもうお決まりのごとく私の友だちのシナ人で溢れていた。地下の空気は余りに酷く息が詰まりそうになったとき、学校の入口の前に出て腰を下ろしお茶の入った保温瓶を傍らにおいた。そして小雨の降る中これから先がどうなるかを待った。四時頃までそんな具合だった。それから「危険は去った」のサイレンが鳴った。飛行機は別の方向へ飛び去った。アーダーホルトは正しかった。雨天の際は「平和」なのだ。睡眠不足を取り戻すため私は眠った。そして今日は日曜日。万歳、依然として雨は降っている！ 楽しいこった！！

九月二十六日 午前十時

こんな時は「楽しんで」いる場合じゃない。当り前だ！ 韓（Han）が今しがた電話してきた。中央党部廣播電台（Central Broadcasting Station）が昨日ひどくやられたという。放送局の城内へのケーブルも断線した。果たして日本軍は目的を達したのだ。南京の大放送局はさしあたり静まり返った。しかしありがたや、その際、人は

死なかつたそうだ。私を行かせてくれるときは、兎に角すぐにそこに行つて法に基づいて (nach dem Rechte) 見なければならぬ。

九月二十六日、午後四時

今しがた車で町を巡回して戻つてきた。中央党部廣播電台 (Central Broadcasting Station) は昨日十発の爆弾を見舞われたが、局自体には大きな被害は出ていなかった。技術者の龍 (Liu) が残念なことに私を建物の中に入れてくれなかつた。何かそこに新たな秘密の建設 (自前の十キロワット放送局) 計画があつて、外に向けては放送局が破壊されたと発表するが、実際の被害は全く大したことはないと私には語つた。中央党部廣播電台 (Central Broadcasting Station) の前、砲弾の飛んだ方角では、様々な家屋 (多分兵舎) と政治犯収容所を囲む塀の一部も破壊されていた。(その際に何人かの人々が死んだ) その他には見るべきものはなかつた。

ヘンベルからは遠くない、中山路の薬局とトランスオーシャン事務所の向かい側で、五、六軒 (後で分かつたところでは十二軒以上) の家が数発の爆弾を受けて全壊してゐた。その前にある地下室では地下室の真ん中にいたため一人残らず爆発した爆弾の爆風で命を落とした。地下室の裏を歩いてゐた人は十歩先の地上に投げ飛ばされたが、命拾ひした。全部で三十人が殺された。赤い鉤十字のある質素な木棺はまだ空の状態で、瓦礫の下に死体がまだないか昨日の午後から捜索が続いてゐる。通りの向こう側の家 (約八軒) は窓や戸が全て内側に押しつぶされてゐた。トランスオーシャン電信サービス (Transocean Telegraph Service) も事務所を出なければならなかつた。中央医院 (Central Hospital) は十五発の爆弾を見舞われた。病院を直接狙つたものかは分からない。(しかし実にそう見える。一つ一つの爆弾でできた大穴が中山路の方に縦一列に並んでゐるからである)。その裏に

は勿論国家資源委員会 (National Resources Commission) とその研究所 (衛生署実験処) があるが、そこはもう一度爆撃されていた。病院の人たちは昨日の爆撃後に病院から出ざるを得なかった。病院の被害がひどかったからだ。人命は二人失われただけだったが、物的被害が酷かった。中庭には爆弾でできた大穴が二つ見られた。直径は約二十メートル、深さは五、六メートルもあった (五百キロ爆弾)。その後の十ないし十五メートルのところに地下室があつて、約二〇〇人を超える人たちが入っていたが、全員が命拾ひした。外国人記者やジャーナリストが破壊の有り様を外の世界に伝えるため荒廢した状態を全て写真にとっていた。

昨夕、SA (註、ジーマンス) の技術者周 (Chow) 氏が上海から到着した。二十六時間の鉄道の旅だった。交通部 (註、交通省) の役人陶 (Tao) 氏の指示で多重電話回線装置 (Mehrfach-Telephon-Anlage) (註、邦訳版は「電話器」としている) を直すために南京へやってきた。確かに周氏は我々の最良の従業員の一人で、私が彼に、旅行中のあなたの身に何が起るかわからないとあなたの家族は心配していいのかと問うと、彼の答えはいつも注目に値する。こう答えるのだった。

「私は妻に言ってるんです。もし私が死んでも、ジーマンスに期待してはいけなし、ジーマンスに要求すべきでもない。そうではなく北にいる私の親戚のもとに行きなさい。そこなら子供と一緒に小さな畑からの収入で生活できる。今回の旅は会社のためだけではない、まず第一に祖国のためにするのだ」と。ここには、シナ人に一般的にあるとは言えない信条がはっきりと現れているのだが、そのような考え方が実際あるのだ。そしてますます勢いを増している、特に中下層にだ。

## 〔比較と研究40〕

このように(一)の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は(二)の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三)のヴィッケルト版では削除されている。従って(四)の邦訳版にもない。

## 〔比較と研究41〕

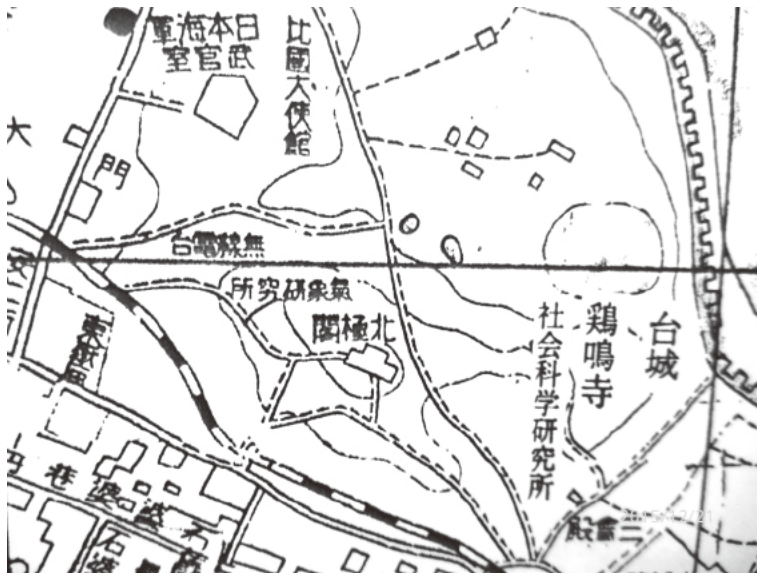
その前日、つまり九月二十五日、日本海軍航空部隊は『週報』の記録によれば、「午前午後四回に互<sup>わた</sup>りそれぞれ数十機を以て軍政部、交通兵団、防空砲台、無電台」(傍点筆者)を爆撃している。

その国民政府の行政院・參謀本部・軍政部と交通兵団は中山門の西、城内中央に位置していた。しかしここに言う無電台は城内のほぼ中央に位置する北極閣の横の軍用無線電台のことではなく、水西門(西門)の西の江東門という集落にあった、高さ一〇〇メートルの鉄塔を誇る中央党部廣播電台(Central Broadcasting Station)であったと、右のラーベの「日記」から判断される。

というのは、ラーベは「中央党部廣播電台の前、砲弾の飛んだ方角では、様々な家屋(多分兵舎)と政治犯収容所を囲む塀の一部も破壊されていた」と書いている。ラーベの言う兵舎、すなわち広大な特殊通信教導隊と、ラーベの言う政治犯収容所、すなわち中央軍人監獄は城外の水西門の西に隣接して存在していたからである。

ところがラーベは、「中央党部廣播電台の前、砲弾の飛んだ方角では、様々な家屋(多分兵舎)と政治犯収容所を囲む塀の一部も破壊されていた。(その際に何人かの人々が死んだ)」という文章に続けて、「ヘンペルからは遠くない、中山路の薬局とトランスオーシャン事務所の向かい側で」と書いている。城内にも勿論中央軍官学校などの兵舎があり、国民政府と鼓楼の間には(兵舎からは遠かったが)政治犯も収容されていたであろう「模範監獄」もあったから、ラーベの「日記」を正確に辿りながら読めば読むほど、読者は、城内のヘンペルからは

共同研究 ジョン・ラーベ「日記」の異同について (一)



城内の無線電台 北極閣 鶏鳴寺



上河鎮の中央党部広幡電台 (左) と中央軍人監獄 (右)

遠くない中山路沿いの中央医院に爆弾が落ちたと読み取ってしまうであろう。そして日本軍機はあたかも城内に無差別爆撃をおこなって死者を出したかのような錯覚に捉われていくであろう。ラーベが、城外の中央党部広播電台（Central Broadcasting Station）と明記するのを意識的に避けていたからである。

#### 〔比較と研究42〕

中央党部広播電台の被害であるが、「この無電台の建物は壊されていません」という実地検分が残されている。ラーベが「外に向けては放送局が破壊された」と発表するが、実際の被害は全く大したことはないとは語った」と記すように、針小棒大にプロバガンダするのがシナ側の方針であった。

南京城内の最大の人口密集地域は城内南部、中華門（南門）の北側であった。日本軍機が、死者十万を超えた昭和二十年三月十日の東京大空襲のような市民無差別爆撃を狙っていたのであれば、南京の城内南部に爆弾を落としていたことであろう。そのような事実はなかったから、そのような記述は当然ラーベの「日記」にも見当たらないのだが、先に引用した上海の『ノースチャイナデイリーニューズ』の南京九月二、十五、日発の「日本軍機再び南京を爆撃」という記事は、「南京の城内南部の最も人口が密集した地域は……爆弾数発を落とされた」と記していた。この記事はラーベの「日記」にも確認できないシナ側のプロバガンダであった。

#### 〔比較と研究43〕

シナ政府は戦闘の敗北を挽回するために盛んにプロバガンダ戦を展開していた。その一翼を担ったのが中央放送局に相当する中央党部広播電台であった。そのため日本軍海軍航空部隊の爆撃目標となったと思われる。以下の山本実彦と長谷川清第三艦隊司令長官の対談は南京中央放送局のデマ放送を伝えている。

「山本 ……それから丁度塘沽沖たんくに來た時に通州事件があつて、天津や、豊台、などの日本軍が全滅したとい



ふ放送を私どもは船中でききましたが、これはあとで南京放送だと判つたんです。

長谷川 あれは周文彬といふ日本の大学を出た若い男が日本語が巧いのでやつたさうです。あれをやらないと自分の地位が危ないのでやつてゐたとも聞いて居ます<sup>(1)</sup>。

一九三七年七月下旬、通州保安隊は北平（註、北京）戦でシナ軍大勝利というプロパガンダに乗せられて、通州（現在は北京通州区）の日本軍守備隊を襲撃しほぼ全滅させて、在留邦人二百数十名を虐殺したが、天津の第二十九軍や天津保安隊日本軍に反撃されて潰走している。それは豊台などでも同じであつた。天津や豊台などの日本軍が全滅したといふ放送はデマだったのである。

註1、山本『興亡の支那を凝視めて』三六九頁。

九月二十七日午前九時

悪い天候だ。つまり晴れ、明るい日光だ！新たな空襲に備えている。世界はなるほど二日前の土曜の夕方（九月二十五日——括弧内原文通り）に引き起こされた災難についてはもう情報を得ていて、新たな爆撃には抗議するであろう。しかし当地では日本がその種の抗議にちよつとも注意を払うだろうとは誰も信じていない。土曜の夕方の中央医院への十五発の爆弾がその前におこなわれた欧米諸国の抗議にたいする答えであることは余りにもはっきりとしていた。

〔比較と研究44〕

このように（一）の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は（二）の一九四二年の『爆撃』にはある

が、(三)のヴィッケルト版では削除されている。従って(四)の邦訳版にもない。

〔比較と研究45〕

(一)の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した「十五発の爆弾」は、(二)の一九四二年の『爆撃』では削除されている。果たして南京の中央医院(日本流に言えば南京中央病院)は二日前の土曜(九月二十五日)の夕方に爆撃されたのであろうか。

日本軍がこの日爆撃したのはすでに述べたように軍政部と交通兵団であったが、国民政府・参謀本部・軍政部から見ると、その東に交通兵団、昆盧寺、こんろ電灯廠、しやう軍事委員会と続いている、そのまた東に中央医院が位置しているため、流れ弾が中央医院付近に落ちた可能性は否定できない。そう思って、上海の『ノースチャイナデイリーニューズ』の一九三七年九月二十九日号の載せる南京九月二十五日発の「日本軍機再び南京を爆撃」という記事を改めて読み直してみると、格好の非難材料となる病院爆撃の件が見当たらない。病院爆撃という事実はなかったようだ。だからラーベは「十五発の爆弾」を削除したのであろう。

九月二十七日午後七時半

今日は一日のうちに空襲が三回あった。

十時から十一時まで

十二時から十三時十分まで

十三時半から十四時まで

午前中は曇り空で、爆撃機はたまに見かけるだけで、しかも遠い遠方に、であった。(我が社が機械を納入し

ている) 永曆 (Yung Li の音訳) 化学工場が酷く爆撃され、一部は破壊されたようだ。永曆はガスを作っている！  
危険物だ！

その後も浦口駅が二、三発の爆弾に見舞われたという。車二台が粉々になった。その他は何も聞いていない。  
水道施設が攻撃されたように思うが、水道の蛇口からはまだ水が出ているし、家の灯りもついている。万歳！

エーメ大尉殿が今夕故郷へ旅立ち、私に六十ドルと引き替えに缶詰と、まだ売れていないため買い手が現れる  
まで私が預かっていてもよいラジオ、そして水量計と電気メーターの保護預り証 (Deposchein) を残していった。  
これらは私が後で、すなわち戦後、彼のために回収してあげることになっている。というのは工場は目下のところ  
保管物に支払わないからだ。それじゃ、良い旅を、エーメさん！ 誰かが旅に出るときは、やはりそれなりの  
取り柄がある。今晚の夕食は練の缶詰だ！ (新聞記事は本稿では省略)

#### 〔比較と研究46〕

このように (一) の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は (二) の一九四二年の『爆撃』にはある  
が、(三) のヴィッケルト版では削除されている。従って (四) の邦訳版にもない。

九月二十八日 午前九時

いい飛行日和だ。日光が出て、空にはうっすらと雲。お昼までは平穏だった。その後十二時から午後二時十五  
分まで警報。日本軍機の訪問。数えると六機だ。高射砲部隊に攻撃されながら、それぞれ三機で二隊列を成して  
東に西にかわしていた。爆弾が何発か落ちる音がした。それから空がますます覆われた。シナ軍機が四機ずつと

町の上空を旋回しているのが見えるが、日本軍機はもう見えなかった。山の上で任務にしていたアーナーデ (Arnade) 少佐から今しがた聞いたところでは、日本軍機は頭上約百メートルのところを撤退していったという。今日トランスオーシャン電信の代理人アイグネン氏 (Herr Eignan) が私の学校の建物に引っ越してきた。トランスオーシャンのシナ人従業員は事務所では働きたくないと言っている。その近くに撃ち込まれた爆弾で事務所に被害が出たからだ。(窓ガラスと扉が風圧で壊れ、部屋の天井も同じく破壊された)。

九月二十八日 午後七時

たった今、プローブスト博士 (Dr. Probst) とリーベ (Riebe) 氏が車で上海から到着した。下関の破壊された発電所を視察し、発電所幹部と工場再開に向けて助言するためであった。

〔比較と研究47〕

このように(二)の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は(二)の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三)のヴィッケルト版では削除されている。従って(四)の邦訳版にもない。

〔比較と研究48〕

南京の城門陥落八日前に作製された「海軍航空部隊空襲成果」<sup>[1]</sup>によれば、この日、日本軍機は南京城外東南の大校場飛行場の格納庫を爆撃している。

註1、内閣情報部編『週報』六一号、二十六頁。

九月二十九日 午前九時

雨。飛行機襲来の心配なし。プロープスト博士と共にトラウトマン大使、フィッシャー参事官、下関発電所、アーダーホルト中佐、NACOCOのC・惲(Yünの音訳)を訪問。

夕方、アーダーホルト氏が青島のシュトレシーウス(Streccius)夫人が心臓病で死んだと報告してきた。彼女が南京で経験した最初の空爆により心臓病が悪化したのだ。

〔比較と研究49〕

このように(一)の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は(二)の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三)のヴィッケルト版では削除されている。従って(四)の邦訳版にもない。

九月三十日

激しい雨。外はまったく見通しが効かない。上海からきた人たちは天候には恵まれた。空襲の心配がないからだ。永曆(Yung Li)工場訪問は中止となる。何(Ho)博士を下関で待ったが見えなかったからだ。鉄道部(註 Eisenbahnministerium 鉄道省)の前で車が故障。軍政部(註 Ministry of War 陸軍省)通信部(Communication Dept.)の王(Wangの音訳)將軍を訪問、その後ハプロを(Aster)。

〔比較と研究50〕

このように(一)の一九三八年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は(二)の一九四二年の『爆撃』にはある

説  
が、(三)のヴェイッケルト版では削除されている。従って(四)の邦訳版にもない。

論  
(KADROYAMA Eisaku & HIGASHINAKANO Shudo, A Comparative Study on the Discrepancies between John RABE's

Manuscripts and Published Diaries (1), *Asia University Law Review*, vol. 50, no. 2, January 2016.)